

聖徒の道

8
1994

末日聖徒
イエス・キリスト
教会



IRENE

90223

Fald de VIMBIE

90

聖徒の道

1994年8月号



表紙——イリーネ・ゴズヴィーは4年前にイタリアで開催された複ステーキ部合同の若い女性キャンプに参加した。このキャンプは、参加した130人の若い女性の生活に今なお影響を与え続けている。(本誌「光を忘れず」p.34参照。写真撮影/ドン・ソープ)

こどものページ——神話や伝説で有名な島に住んではいても、10才のイリアム・ジョーンズは真理がどこにあるかを知っています。(「こどものページ」「マン島のイリアム・ジョーンズ」14ページをご覧ください)

一般

- 大管長会メッセージ——ペテロは外に出て激しく泣いた
第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー…………… 3
- 「きょう来てくれるってわかってたよ」 オーレ・M・スミス…………… 8
- 古代イスラエルからの贈り物 リネット・H・ケリー…………… 15
- すべての者が語る時 プレント・A・バーロー…………… 18
- 水に漂うパンフレット ガマリエル・アルシデス・バスケス…………… 23
- 静かな細い声を聞けるように子供たちを助ける
C・テリー・ワーナー、スーザン・L・ワーナー…………… 27
- 種まきの日 ネットサワルコヨトル・サリーナス・V…………… 32
- 私のばらの木…………… 41

青少年

- アルビン・マルチネス——天まで届け マイルス・ツアーサン…………… 11
- 光を忘れず ドン・ソープ、キャサリン・ソープ…………… 34
- 心からの祈り セツ・H・ボイル…………… 44
- 信じることに固く立って ジェームズ・E・ファウスト長老…………… 47

定期特別記事

- 読者からの便り…………… 1
- 家庭訪問メッセージ——神殿参入のチャレンジと祝福…………… 25

こども

- モルモン経物語——むすこたちをいましめるアルマ…………… 2
- おもちゃばこ…………… 5
- チョコレート ジェーン・マクブライド・チョート作…………… 6
- 分かち合いの時間——せいてんをしらべなさい ジュディ・エドワーズ…………… 10
- ちいさなみんなのために——アビーの日 ミッシェル・プラム・オリバー…………… 12
- 友だちになろう
マン島に住むイリアム・ジョーンズ リチャード・M・ロムニー…………… 14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ハワード・W・ハンター、ゴードン・B・ピンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド

編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン
顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、スペンサー・J・コンディエ、ジョン・H・グローバーク

教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ

国際機関誌
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

ウオーカー
工程管理：メアリーアン・マーティンデール
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニース・カービー

予約購読スタッフ
購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケント・H・ソレンセン

聖徒の道1994年8月号第38巻第8号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 リック/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円, 大会号350円

Copyright © 1994 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1992年10月 翻訳承認—1992年10月 原題—International Magazines August 1994, Japanese, 94988300
●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

太切な導き手

1965年の12月にバプテスマを受けて以来、「リアホナ」(ポルトガル語版)を毎月読んでいます。末日聖徒の家族にとって「リアホナ」は霊的な面で大切な導き手になっていると思います。

世界各地にいる、福音で結ばれた兄弟姉妹の記事を読むのは何より楽しいものです。

「リアホナ」の発行に携わっているすべての人々に感謝しています。「リアホナ」を読むことは、霊的に成長し、よりよい人になるうえで役立っています。

ブラジル, サンパウロ
ジュワン・グエアニーリ

とてもすばらしいメッセージ

宣教師に初めて出会ったのは1992年のことです。初めてレッスンを受けた時から、心に何か特別なものを感じました。レッスンが進むにつれ、それまでその存在すら知らなかった福音の原則をいくつか学んでいきました。教会の集会に初めて出席した時には、教会員のかたがたからまるで昔からの知り合いのような温かい歓迎を受けました。

家族の中で私が最初にバプテスマを受けました。現在では私のふたりの姉妹も教会員となり、父もモルモン経を読んでいます。

「リアホナ」(スペイン語版)を読むようになって数カ月たちましたが、その内容にとっても満足しています。

1993年2月号に、トーマス・S・モンソン副管長の「イエスが歩まれた道」という記事が掲載されていましたが、ほんとうにすばらしいメッセージでした。モンソン副管長の次の勧告に深い感動を覚えました。「イエスの言葉が唇にあり、イエスのみたまが心に宿っていれば、またイエスの教えが生

活に溶け込んでいけば、ある意味において私たちは、この世の旅路を歩きながら、イエスの歩まれた道を歩むことができます。」

「リアホナ」に記されたメッセージから、多くのことを学んでいます。各地の聖徒たちについての記事や彼らの証は、私の励みになるだけでなく、まだ教会員でない人々にとっても助けとなっています。

プエルトリコ, マヤグエースステーク
イサベラ支部
ワンダ・リベラ

霊的に強められます

「レトワール」(フランス語版。「星」の意)に、心から感謝しています。

私は大管長会メッセージを読むのが大好きです。世界じゅうの聖徒たちの経験も楽しく読んでいます。

この機関誌を通して、毎月、霊的に強められています。毎月「レトワール」が届くのを楽しみにしています。皆さんの働きに感謝します。

タヒチ, パエアステーク部
ヒティアワード部
レオナルド・ヘオムーン

編集部から

世界じゅうの愛読者の皆さんに心から感謝しています。皆さんの手紙、記事、物語などをお寄せください。どの国の言葉でもけっこうです。(投稿の際は、住所、氏名、ステーク部/伝道部/地方部、ワード部/支部名を明記してください)あて先は下記のとおりです。

International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.



ペテロは外に出て 激しく泣いた

第一副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

エルサレムで最後の晩餐^{ばんさん}が行なわれた後の、あの恐ろしい一夜に思いを
I 巡らしていただきたいと思います。イエスと弟子たちは町を出ると、
オリブ山へ向かいました。イエスは恐ろしい試練が間近に迫っていることを
知り、愛する弟子たちにこう言われました。「今夜、あなたがたは皆わたし
につまずくであろう。〔つまり、私を見捨てるであろう〕……

するとペテロはイエスに答えて言った、『たとい、みんなの者があなたに
つまずいても、わたしは決してつまずきません。』

イエスは言われた、『よくあなたに言うておく。今夜、鶏が鳴く前に、あ
なたは三度わたしを知らないと言うだろう。』

ペテロは言った、『たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あ
なたを知らないなどとは、決して申しません。』(マタイ26:31, 33-35)

その後間もなく、主はゲツセマネの園で非常な苦しみを受け、さらに弟子
に裏切られました。行列がカヤパの邸宅に向かって行った時、「ペテロは……
ついて、大祭司の中庭まで行き、そのなりゆきを見とどけるために、中には
いって下役どもと一緒にすわって」いました。(マタイ26:58)

ペテロは決して救い主を拒まないと
言い張った。ところが肉の弱さにと
らえられ、非難の圧力に負けて、決
意が崩れた。自分の過ちと弱さに気
づいたペテロは「外に出て激しく泣
いた。」

イエスを笑い物にする裁判が進み、告発者たちはイエスの顔につばきをかけ、こぶしで打ち、手のひらでたたいていました。するとひとりの女がペテロを見て「あなたもあのガリラヤ人イエスと一緒にいた」と言いました。

「するとペテロは、みんなの前でそれを打ち消して言った、『あなたが何を言っているのか、わからない。』」

そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこに居る人々にむかって、『この人はナザレ人イエスと一緒にいた』と言った。

そこで彼は再びそれを打ち消して、『そんな人は知らない』と誓って言った。

しばらくして、そこに立っていた人々が近寄ってきて、ペテロに言った、『確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたのことがわかる。』

彼は『その人のことは何も知らない』と言って、激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。

ペテロは『鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた。(マタイ26:69-75, 下線付加)

なんと非哀が込められた言葉でしょうか。忠誠と決意を誓い、決して主を否定しないと約束したペテロが、肉の弱さに負け、非難の圧力に屈してもろくも崩れたのです。そして自分の弱さと過ちに気づいたペテロは「外に出て激しく泣いた」のです。

高い目標を掲げていながら、 低い実績で終わってしまう悲劇

私はこの出来事を読んでペテロに心から同情しました。ペテロのような人間は私たちの中におおぜいいます。私たちは、忠誠を誓い、勇気を失わないと決意し、どのようなことが起ころうと自分は正しいことを行ない、大義を守り、自己と他人に誠実を尽くすと、ときには公衆の面前で宣言します。

しかし、そんな私たちに圧力が加わってきます。それはときに、社会的な圧力であったり、個人的な欲望であったりします。また誤った野心である場合もあります。意志の弱さ、自制心の欠如から誘惑に屈して後悔し、やがて自責の念と悔恨の苦い涙を味わうことになるのです。

私たちがよく目にするもうひとつの悲劇について考えてみましょう。それは、高い目標を掲げていながら、低い実績で終わってしまう人々のことです。彼らの動機は高邁で、いつもすばらしい抱負を語ってくれます。能力も優れています。しかし自制心が弱く、怠惰に負け、努力不足から当初の意志をなくしてしまうのです。

私の知人の中にもそのような人がいました。彼は教会員ではありませんでしたが、一流の大学を卒業し、前途は洋々たるものでした。りっぱな教育を受け、仕事にも恵まれていたこの青年は、大きな夢を抱き、それに向かって一心に突き進みました。勤め始めた会社で、彼は階段を駆け上るように出世し、あっという間に会社のトップに躍り出ました。しかしそのために何かと酒を飲むことが多くなりました。そしてほかの人と同じように、彼も自分を制御できなくなりました。結局アルコール中毒となり、抑えることのできない欲望のとりこになってしまったのです。彼の力になろうとする人々は養生を勧め、彼自身助けを求めていたのですが、プライドがじゃまをしてなかなか自分を変えることができませんでした。

そして、流星のようにはかなく暗闇の中に消えてしまったのでした。私はあちこちの友人に問い合わせ、ようやく彼の悲しい結末を知りました。高い目標と優れた才能を持っていた彼は、大都会の片隅でひとり寂しく一生を終えたのです。彼は自己の可能性を最大限に伸ばす才能と能力が自分にあることを知っていました。しかし彼はその能力をみずから棒に振ってしまいました。そして失敗の影が彼の周囲に忍び寄ってきた時、彼はきつと外に出て激しく泣いたことでしょう。

また私には、かつてイギリス諸島で伝道していた時に、



ペテロは足の不自由な男に向かってこう言った。「『金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。』こう……してやると……踊りあがって立ち、歩き出した。そして……神をさんびしながら……行った。」(使徒3:6, 8)

教会員になった友人がいます。彼には当時喫煙の習慣がありました。そこで彼は、教会員になろうとした時、たばこをやめられるように祈りました。主はその祈りにこたえて、彼にその習慣を断ち切る力を与えてくださいました。彼は神を仰ぎ見て、いまだかつてなかったような喜びの生活を送ることができました。しかし問題が生じました。家族と社会から圧力が加かったのです。その結果、ついに彼は自分の標準を下げ、欲望に屈するようになりました。たばこの煙が彼を誘惑したのです。それから何年かして、私は彼に会い、ふたりで古きよき時代のことを語り合いました。そのうち彼は激しく泣きながら、あれが悪いのだ、これが悪いのだと責任を転嫁し始めました。この時、私の頭の中にあのキャシアスの言葉が浮かんできました。

「ねえ、ブルータス、^{ぼく}僕らがうだつの上らないのはね、なにも運勢が悪いんじゃない、僕ら自身が悪いんだ。」(ウィリアム・シェークスピア「ジュリアス・シーザー」第1幕第2場、岩波文庫、中野好夫訳)

高邁な理想を掲げて始めたのはよいが結局しりすばみになっていく人、元気いっぱいスタートしたのはよいがへとへとに疲れて帰ってくる人、こういう人はたくさんいます。人生を野球にたとえると、おおぜいの人々が一塁や二塁、あるいは三塁までたどり着くことはできます。しかし、どうしても本塁まで帰って来ることができないでいます。彼らは寛大な心を否定し、自分の財産にしがみつき、生活は自己中心的で殺伐としており、才能や信仰を他人と分かち合うこともなく、ただ自分だけで生きようとする傾向があります。主はそのような人々について、こう言うとおいでになります。「^{しか}而して主の来りたもう日、また^{さば}審きの日、また主の怒りの日に汝らは嘆き悲しみて言わん。あゝ、刈り入れは終り夏はすでに過ぎ去りぬ、われは救われず、と。」(教義と聖約56:16)

私はまた、主を愛し、主のみ業を愛していると公言しながら、口に出して言うか言わないかにかかわらず、主を否定している人々について一言申し上げたいと思います。

信仰を失う悲劇

かつて信仰もあつく、献身的に主のみ業に励んでいたひとりの青年がいました。彼は感じやすい年ごろの私を導いてくれた友でした。彼の生き方、熱心な奉仕は、主と教会のみ業を彼がどれほど愛していたかをよく物語っていました。ところが、彼の能力を当て込んで自分たちの勢力を伸ばそうとする仲間の甘言に乗せられ、彼は次第に教会を離れていきました。彼は自分の信仰や行ないの中に仲間を導くのではなく、逆に誘いに乗って正反対の方向に行ってしまったのです。

別に彼が自分のかつて持っていた信仰に反する発言をしたわけではありません。そんな言葉を聞くまでもありませんでした。彼の生活態度の変わりようを見れば、信仰を捨てたことは明らかでした。それから数年して私たちは再会しました。彼は迷いから覚めたように語ってくれました。かつて宝のように大切にしてきた信仰の錨を断ち切ってからの流浪の生活を、低い声で、伏し目がちに話してくれたのです。そして話し終えると、彼はあのペテロのように激しく泣いたのです。

何年前か、ある友人と話をしていた、共通の知人のことが話題に上りました。彼は仕事の面でかなりの成功を収めている人でした。「ところで、彼は教会ではいかがですか」と私が尋ねると、友人からこういう返事が返ってきました。「心の中では教会が真実だとわかっているようですが、恐れがあるんですね。教会員として教会の標準を守るようになると、今の同僚たちから相手にされなくなりはいらないかと心配しているんです。」

その時、私はこう思いました。「彼は年取るまで気づかないかもしれないが、いずれ静かに自分を振り返った時、自分が持っていた長子の特権を1杯のあつもの（創世25：34参照）と交換したことを知って、後悔の涙を流すことだろう。それは自分自身主を拒んだだけでなく、子供たちの前で主を拒んだことにもなるからだ。そのために子供たちは大切な信仰なしに育つことになったのだ。」

主はみずからこう言われました。「邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう。」（マルコ8：38）

悔い改めて信仰を証明したペテロ

さて、最後にもう一度、主を否定して泣いたペテロの

ことを考えてみましょう。ペテロは自分の過ちを認め、自分の弱さを悔いて、心を入れ替え、復活された主を証する力強い証人となりました。そして、前任使徒として、生ける神の御子イエス・キリストの使命と、死と復活を証することに余生を捧げました。ペンテコステの日に、彼が力強い説教を述べた時、群衆は聖霊の力によって心を動かされました。ペテロはまた救い主から受けた神権の権能によって、ヨハネとともに、足の不自由な人を癒しました。その奇跡がもとで彼らに迫害が及ぶようになりましたが、彼は議会に引き出された時も、兄弟たちの前で臆せず証を述べました。また、異邦人に福音を宣べ伝えるようにという示現を受けたのもペテロでした。（使徒2－4，10章参照）

ペテロは、自分を人間をすなわける漁師に召してくださいました。主の証人として（マタイ4：19参照）、鎖につながれ、牢獄に入れられ、そして恐ろしい殉教の道をたどっていったと伝えられています。復活された主は、最後の教えの中で、11人の使徒たちに「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し」なさい（マタイ28：19）、と命じられました。ペテロは、この時に主が示してくださいました偉大で、人を動かさずにはおかない信頼に最後まで忠実にこたえたのです。またこの神権時代に、ヤコブ、ヨハネとともにこの地上を訪れて、聖なる神権を予言者ジョセフ・スミスに回復したのも、ほかならぬペテロでした。この神聖な権能の下に末日聖徒イエス・キリスト教会は組織され、今も治められているのです。これらの大いなる働きと、そのほかにも数々の貢献をしたペテロも、一度は主を否定し、悲しみに暮れました。しかしその過ちから立ち上がると、救い主が昇天された後のみ業を推し進め、さらにはこの神権時代へのみ業の回復に寄与したのです。



ペテロは足の不自由な人を癒して非難されたが、議会に引き出された時も、兄弟たちの前で臆せず証を述べた。イエス・キリストを証してこう宣言した。「わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない……。」(使徒4:12)

真理に立ち返る決意

さて、もし教会員の中に、言葉や行ないで信仰を拒んでしまった方がいらっしゃるならば、イエスと寝食をともにしながらも、窮地にあつて主と自分の心にあつた証を否定したペテロの例から慰めを得て、新たな決意をしてくださるよう祈っています。ペテロは、その悲しみの状態から立ち上がり、りっぱな擁護者、力強い支持者となりました。同じようにだれでも自分を変え、力と信仰を増し、ほかの人々と協力して神の王国を築くことができるのです。

私の知人の中に、教会を愛して育ったひとりのすばらしい男性がいます。彼はかつて仕事に熱中し大きな野心を抱き、そのために信仰を拒み始めたことがありました。

生活もほとんど信仰とは無縁のものとなり始めた時、さいわいなことに、深みにはまる前に静かな細い声のささやきを聞くことができました。そして後悔の念に駆られました。間もなく彼は主に立ち返り、シオンのステーキ部のステーキ部長となったのです。

同じように迷いを持っている愛する兄弟姉妹の皆さん、教会はあなたを必要としています。あなたもまた教会が必要なはずで。教会には温かい心を持って耳を傾ける人がおおぜいいます。皆さんを引き戻してくれるおおぜいの援助の手があります。あなたの心を温めてくれる人がいます。そこにある涙は苦しみの涙ではなく、喜びの涙です。

みたまの力を通して主が皆さんの心を動かし、皆さんの希望を増してくださり、皆さんが確固たる決心ができるように願っています。そして心の中で真実だと感じているものに立ち返ることで得られる喜びと平安、満足、じゅうぶんに享受できるよう心から祈っています。□

話し合いのポイント

1. ペテロは忠誠を誓ったが、非難の圧力に屈してもろくも崩れた。
2. ペテロは、ひとたび自分の過ちに気づくと、悔い改め、主の偉大な僕しもべとなった。この出来事から教訓が得られる。
3. ペテロと同様、私たちの多くは、忠誠を誓い、自己と他人に誠実を尽くすと決意する。しかし、圧力が加わってくると意志が弱まり、誘惑に屈する。そして苦い涙を味わう。
4. 悔い改めたペテロの模範に従わないなら、「刈り入れは終り夏はすでに過ぎ去りぬ、われは救われず」と言って嘆き悲しむ日が私たちに訪れる。(教義と聖約56:16)
5. だれでも弱さを克服し、力を増し、人々と協力して神の王国を築くことができる。

「きょう来てくれるってわかってたよ」

オーレ・M・スミス

プエルトリコに住んでいた何年か前のことです。当時のホームティーチングの同僚は、私と同様、教会員歴の長い、帰還宣教師でした。ふたりとも、福音の知識には自信があったのですが、8歳の少年から貴重な福音の教訓を学ぶことになりました。私たちは皆、純粋な信仰を持って生活するよう勧告されています。少年は、そのような信仰を行使しただけなのです。

ビルと私はランバート姉妹のホームティーチャーの召しを受けていました。彼女は年輩の婦人で、プエルトリコにおける最初の教会員のひとりでした。しかし、夫に先立たれてからは、植物や種を扱う自分の小さな店で働くことに、さらに多くの時間を費やすようになり、教会の集会や活動で彼女を見かけることがだんだん少なくなってきました。

家を訪ねても留守がちで、なかなか会えなくなりました。しかし、ビルと私はなんとか定期的に彼女を訪問していました。私たちは特別なレッスンを準備して訪問し、彼女が再び活発に教会に集うように最善を尽くしました。しかし、何をしても効果は表われないようでした。彼女は福音について強い証あかしを持っていると言いましたが、それでも教会に出席しようとはしませんでした。

ある日曜日、ランバート姉妹が早く家に帰っているかもしれないと思い、電話をかけてみました。彼女が電話に出た時、ビルを呼んで今すぐに彼女を訪問すべきだと思いました。ところが、あいにくビルは高等評議員の責任で出かけていました。

私の頭にいろいろなアイデアが浮かんで消えましたが、やがてとてもいい考えがひらめきました。それは、最近バプテスマを受けたばかりの息子、トレントを連れて行くことでした。

「トレント、ネクタイを締めてくれないか。一緒にホームティーチングに行くんだ。」

息子は私の言葉に驚いた様子でしたが、得意げにネクタイをつかんで首に結びました。こうしてふたりで出かけました。

ランバート姉妹の家に行く途中、トレントにメッセー

ジを伝えさせるべきだという導きを受けました。そこで、運転しながら、息子ときょうのメッセージについて話し合いました。到着するころには、準備ができていました。

ランバート姉妹が小さなトレントにあいさつした時の笑顔を私は今も覚えています。しばらくおしゃべりした後、トレントはすばらしいレッスンをしてくれました。私たちはこの訪問に温かい気持ちを感じながら帰路に就きました。

それから数週間が過ぎ、断食安息日の前の晩となりました。私はトレントに、最近断食日に目標を決めて断食したことがあるかい、と尋ねました。そして、断食がもたらす祝福を一つ一つ挙げ、目的を持って断食することの大切さを説明しました。「もしそれが正しい願いであれば、主はおまえがそれを実現できるように助けてくださるんだよ。」

すると、こんな返事が返ってきました。「わかってるよ、パパ。もう特別な目標を決めてあるんだ。」

翌日の午後、礼拝堂に入ると、私は自分の目を疑いました。長いこと教会に来ていなかったランバート姉妹がいたのです。

少し時間がかかったものの、とうとうビルと私の思いが彼女に通じたんだ、と思いました。彼女は私たちのメッセージを聞き、ついに私たちの気持ちをくんでくれたのです。

私は、トレントにもこのすてきな出来事の感動を伝えようと、耳元でこうささやきました。「きょうはランバート姉妹が来てるよ。うれしくないかい。驚いただろ。おまえのおかげなんだよ。」

息子の答えを聞いて、私は言葉に詰まりました。「うれしいさ。でも、驚いてはいないよ。ほく、彼女が教会に戻るように断食したんだ。だから、きょう来てくれるってわかってたよ。」

ひとりの子供の断食に対する信仰によって、彼女の生活は変わりました。そして私自身も考えを改めました。このような経験ができたことに感謝しています。□





アルビン・マルチネス ——天まで届け

マイルス・ツアーサン

マニラ市のブエンディア通りにある簡素な教会堂は、その近隣に簡素とは言いがたい建物が建ち並んでいるので、少し場違いのように見えます。マニラ市内有数の超高層ビルが、フィリピン・マカステキ部のステーキ部センターも兼ねているこの教会堂を取り囲むようにそびえ立っているのです。この地域はかつて、なんの値打ちもない湿地と見なされていた所でした。

教会堂のバスケットボールのコートでは、ステーキ部の青少年によってスポーツ大会が行なわれます。このようなありふれた活動も、とても有意義な活動となることがあります。たとえば、マンダロン第3ワード部のバスケットボールチームを見てください。すぐにひとりの青年の姿に目が留まることでしょう。青年はよろめき、びっこを引きながら、屋外

アルビンは、身体的障害を持つために人と接することに臆病になっていたが、今では教会活動に積極的に参加しており、教会の友達といふことを何よりの楽しみとしている。



コートの上をやっとの思いで歩いています。

ひざを傷めているのでしょうか。

手首をねんざしているのでしょうか。

そのどちらでもありません。この青年は体の一部がまひしているのです。

湿地から高層ビル街へ

アルビン・マルチネスにとって障害に打ち勝つのは、ちょうど湿地を高層ビル街に変えていくようなものです。アルビンは健康な赤ちゃんとして生まれました。そしてフィリピン人の赤ちゃんならだれでもするように、ポリオワクチンの注射を受けました。しかしどういう訳か、ワクチンがアルビンの神経を侵してしまいました。右脚と右腕は次第に動かなくなり、ついにはワクチンが原因で、右半身全体がまひしたのです。

クラスメートたちは、びっこを引きながら教室に向かうアルビンを見かけるたびに彼を笑い物にしました。

「おい、アルビンだぞ。」だれかがそう呼びます。

「道はまっすぐだっているのに、なんでくねくねと歩くんだい？」と別の

アルビンは、バスケットボールや奉仕活動、セミナリーなど、あらゆる面で、ワード部の最も活発な若い男性のひとりである。

だれかがからかって言います。

「アルビン、アルビン、ピレイ！」ピレイとは体の不自由な人を指す言葉です。まっすぐ歩けるクラスメートは、それをアルビンに対するあざけりの言葉として好んで用いたのです。

アルビンの受けた試練は、人からいじめられることだけではありませんでした。アルビンの父親が脳卒中で急死したのです。父親を失い、クラスメートの中傷に苦しんだアルビンは、次第に学校や教会に行かなくなりました。そして「バルカダ」と呼ばれる仲間と交わるようになりました。

マニラで「バルカダ」と言えば2種類あります。高め合える友人の集まりと、互いの品位を落とすような仲間とのつながりです。アルビンの入った「バルカダ」は、よい影響を与えるバルカダではありませんでした。それでもなお、アルビンは末日聖徒の標準を守り続けようとしてきました。アルビンは当時を振り返ってこう語ってくれました。「友達にたばこを吸うように誘われたけど、ぼくはモルモンだから断りました。」

ダビデとゴリアテのように

やがてアルビンは決心しました。「障害にめげずに立ち上がろう、いにしへのダビデのように、自分自身にとってのゴリアテを倒そう」と。中断していた学業を続けることも固く決意しました。アルビンの母親は、夫に先立たれてから仕立屋として働いていましたが、アルビンの決心に胸をなで下



ろしました。母親はそれまでアルビンに根気強くこう言い聞かせてきたのです。「しっかり学問を身につけるのよ。そうすればきっと明るい将来が開けてくるんだから。」

アルビンは学校で新たな「バルカダ」と出会いました。アルビンに対して敬意を持って接してくれるクラスメートたちです。「クラスメートのみんながとてもやさしくて、親切なんです。」顔を輝かせてアルビンは言います。

初め、彼は人と接することに臆病になっていました。しかし、もともと冗談好きで陽気なアルビンは、教会を第二の我が家とを感じるようになりました。「教会にいただけで楽しい気分になりました。若い男性の友達と一緒にいるのも好きでした。」教会のすばらしい友達や神権定員会の兄弟たちの影響を受けて、アルビンの証は強まりました。そして青少年の指導者の励ましを受けながら再び教会に集うようになりました。アルビンと語り合った指導者たちは、アルビンに障害を恥じてはいけなくと繰り返したものでした。指導者のひとりはこちら述懐しています。「自分が価値のある存在であることをアルビンにわかってもらいたかったのです。そしてようやく、自分が認められていると感じてくれるようになりました。」アルビンは家族に福音を伝えてくれた宣教師たちに心から感謝しています。そして何よりも、青少年の指導者に深い感謝の念を抱いています。もがき苦しんだ経験の後に、教会に戻るよう手を差し伸べてくれたのですから。

行って行なう人

今ではアルビンは、ワード部の中でも最も活発な若い男性のひとりとなっています。彼にとって、教会の友達といることが何よりの楽しみとなっています。

アルビンはうれしそうに言いました。「教会の友達はほくといいことを恥じたりしません。ほくのことで悪い冗談を言ったりすることはありません。」その代わりに、アルビンの方がいつも冗談を連発しているのです。

また、アルビンの献身的な態度は称賛に値します。ある日曜日、アルビンはほかの若い男性たちとにぎやかに話をしていました。

「今日の日曜日、ほくたちで教会の敷地を掃除するようにだててさ。」ひとりが言いました。

「もっとおもしろい活動がほかにあるのにな」と、もうひとりが答えました。

するとアルビンがこう言ったのです。「でも言われたことを最初にやってみようよ。」

そして土曜日が来ました。ほかの若い男性がまだ来ないうちに、アルビンは作業着に着替えてすでに準備を済ませていました。教会員でないいとこまで連れて来ていました。

このようなアルビンの姿を見れば、「私は主が命じたもうたことを行って行く」(Iニーフай 3:7)というアルビンの好きな聖句が彼の特質と結びつくことでしょう。

最近アルビンはセミナーで皆勤賞を受けました。マニラで末日聖徒の青少年のためにセミナーが開かれる時間は、たいてい日中から夕方にかけてのラッシュアワーと重なります。けれどもアルビンは時間に遅れたりしません。「セミナーで学んだことの実践という面でも、アルビンは最善を尽くしています。」アルビンのセミナー教師であるノーラン・カーセレス兄弟はそう話してくれました。

アルビンの最善を尽くす姿勢は、ほかの活動でも見ることができます。アルビンの所属するワード部のバスケットボールチームは、ステーキ部のスポーツ大会で準優勝を取めました。ま

た集会所で行なわれる活動の夕べについてカーセレス兄弟はこう語っています。「アルビンは頼りになりますよ。必ず来てくれますからね。」

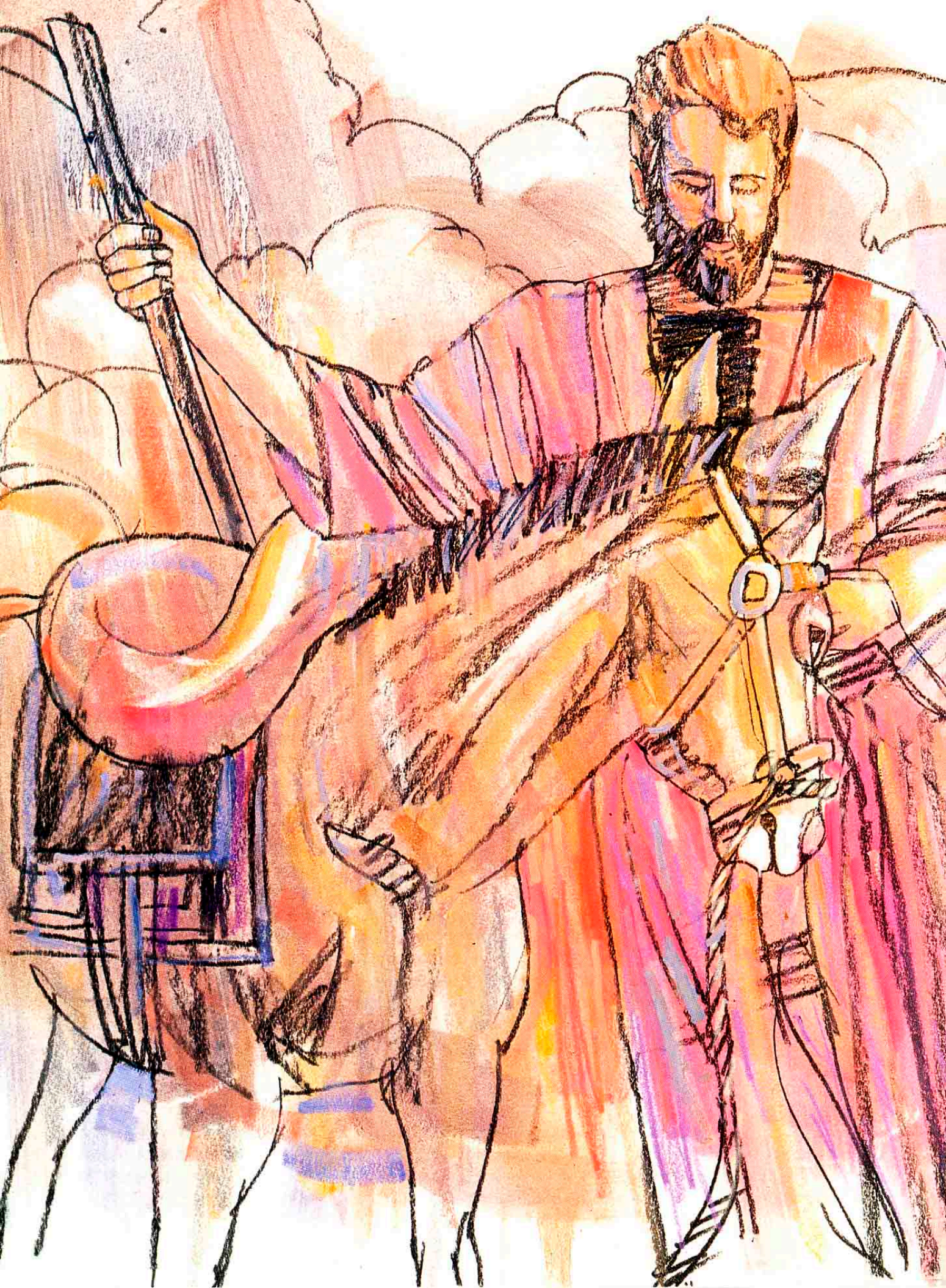
夢を高く持つ

ステーキ部センターの周りにそびえ立つ高層ビルのように、アルビンも高い希望を持っています。それは、将来実業家になることです。ただし当面の第一の目標は、伝道に出ることです。アルビンは学校ではすでに、彼独特の方法、つまり目立たなくてもひたむきな模範を通して、ほかの人々の関心を教会に引き寄せてきました。

聖典の中で好きな人物はだれですか、という質問に、アルビンはしばらく考えてからこう答えました。「モーセだと思います。」アルビンらしい答えではないでしょうか。モーセは主の召しを受け入れる前、口が重いので自分はこの責任を果たせないと感じていました。(出エジプト 4:10参照)しかし個人的な弱点があるにもかかわらず、モーセは主から期待されたことを成し遂げました。この模範にアルビンは従っているのです。

障害を持ったフィリピン人は、看護を受けられる病院や施設に収容されることが多く、社会からつまはじきにされたような人もいます。しかしアルビンは例外です。カーセレス兄弟はこのように付け加えました。「アルビンは有益なことを行なえるようになったのです。世間は彼にそんなことは無理だと思っていましたけどね。」

そうです。有益なことを行なっているのです。バスケットボールをし、学校に行き、そして福音を分かち合っているのです。今、アルビン・マルチネスは、だれでも苦難から立ち上がることができ、マニラの高層ビルのように天まで届くことができると確信しています。□





古代イスラエルからの 贈り物

リネット・H・ケリー

旧約聖書には、古代イスラエルの靈感あふれる教えが数多く記されています。それは、主に従う末日聖徒にも当てはまる教えです。今日の生活が旧約の時代と多くの点で異なっているのは確かですが、永遠の真理はどの時代の神の子供たちにとっても同じです。旧約聖書は、生涯を通じて私を導いてくれました。この書物に含まれるたくさんの宝を、私は「古代イスラエルからの贈り物」と考えています。

子供への贈り物——バラムのろば

バラムはイスラエルに対して悪意を持っている人たちと旅をしていました。主はひとりの使いを送って、バラムの行く手を遮ろうとなさいました。バラムのろばには、道に立ちふさがっている天使の姿が見えましたが、主人

のバラムには見えませんでした。ろばは前に進むのを3度も拒否しましたが、そのたびにバラムについで打たれました。

「すると、主が、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムにむかって言った、『わたしがあなたに何をしようのですか。あなたは三度もわたしを打ったのです。』」主に目を開かれたバラムは、主の使いの姿を見ました。そして、主の使いから、ろばが自分の命を救ったことを告げられたのでした。(民数22：5-35参照)

旧約聖書には、おとぎ話よりもずっとおもしろいこのような話がいくつも記されており、子供のころの私は胸を躍らせたものです。ろばが言葉を話すところを想像してみてください。天父はこのようなすばらしい奇跡を起こせるお方なのです。

母親である私は、子供たちよりもずっと早く起きて、

日のよく当たる居間に座って静かに聖典を読む朝のひとときを大切にしています。やがてパジャマ姿の幼い息子が寝室からよるけながら出てきて、眠たい目をこすりながら私のひざの上によじ登りこう尋ねます。「何読んでるの、ママ。」

そんなときは、子供たちに旧約聖書からのお話という贈り物をするようにしています。まず最初に子供たちのお気に入りのお話をして聞かせます。たとえば、ノアの箱舟の話（創世6－8章参照）やヨセフの長そでの着物の話（創世37：3－36参照）、刀で子供をふたつに分け、それぞれを自分の子供だと主張する母親に与えるように命じて、ほんとうの母親を突き止めたソロモン王の話（列王上3：16－28参照）などです。

その次に、あまりよく知られていない英雄の話をして。たとえば、ダビデ王に仕えた3人の勇者のような話がそうです。ペリシテ人との戦いの最中に、この3人の勇者は敵陣を突き抜け、命がけて自分たちの王が飲みたいと願った井戸の水を持ち帰ったのでした。（歴代上11：10－19参照）

旧約聖書には、子供たちが楽しみながら学べるこのような話がたくさん記されています。

若人への贈り物——健康に関するアサの教訓

大学時代、私は長い間健康上の問題で苦しんだ経験があります。処方された薬をいろいろ試してはみるのですが、病状はさらに悪化していくだけのように思えました。そのような折も折、私はアサの物語を読んだのです。

「アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなったが、その病の時にも、主を求めないで医者を求めた。

アサは先祖たちと共に眠り、その治世の四十一年に死んだ。」（歴代下16：12－13）

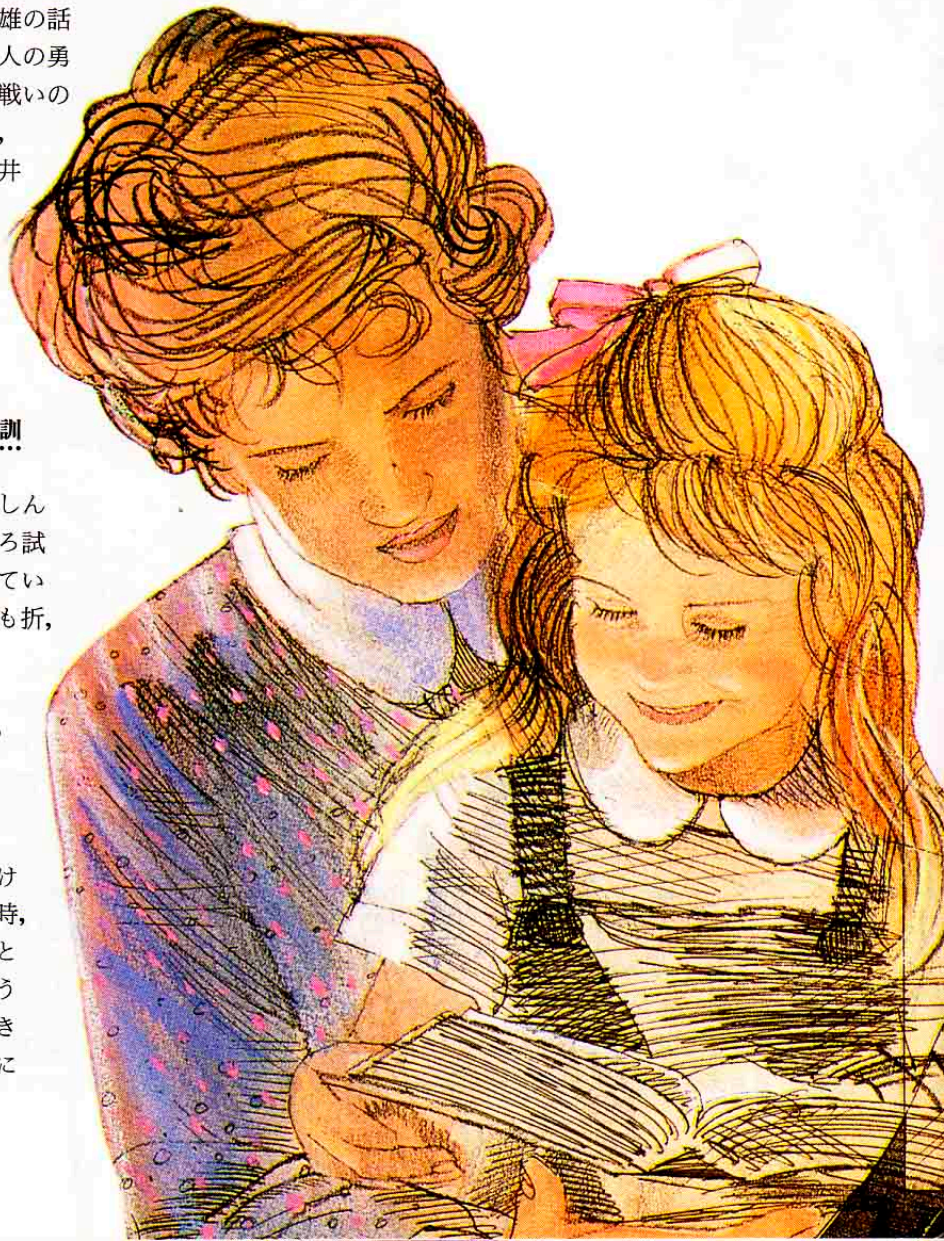
アサのように、私も「医者を求めた」だけだったのです。しかし、この聖句を読んだ時、一体どなたに癒しを求めべきかはっきりとわかりました。医学の指示にすべて従ったうえで、私は祈りました。すると主は私に導きと祝福をお与えになりました。以来、長年に

わたって、これらの問題から解放されて生活してこられました。

宣教師への贈り物——競争と戦い

質問——「もしあなたが、徒歩の人と競争して疲れるなら、どうして騎馬の人と競うことができようか。」（エレミヤ12：5）

回答——「主はあなたがたにこう仰せられる、『……恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。』（歴代下20：15）



伝道中、自分の目の前でドアがびしゃりと閉められることに、もうこれ以上耐えられないと思った時がありました。疲れ切ったまなざしから、後輩の同僚も私と同じような思いを抱いていることがわかりました。私たちは町じゅうを通り過ぎ、広大な穀物畑に出ました。私は用水路の壁によじ登ると、泥土と、風の中で愛想よく揺れる背の高い黄色の穂波に向かって、つまり、いやがおうでも聞かざるを得ないこの聴衆に向かって声高らかに説教を始めました。

私は、教義と聖約第4章で語られている「刈り入れを待つ」人々に伝えたいと切に願っていたメッセージを、その畑に向かって伝えたのです。私は心から、主のために人々の霊を刈り入れたいと願っていました。私たちは勢力を尽くして鎌を入れていたはずです。それにもかかわらず、依然として徒歩の人と同じ速度で歩いているように思われました。私たちの目標は手の届かぬ所にあり、馬のように速く遠ざかっていくように思われました。そんな時に、歴代志下の上述の聖句から、私たちの慰めとなる新たな見方を学びました。私たちの戦いがほんとうはどなたの戦いなのかを思い起こしたのです。主が刈り入れをされる時期は今まさに目の前に迫っています。現世での戦いや競争におけるほんとうの勝利者というのは、この世の基準では決められません。

両親への贈り物——「願わしいことは、 彼らがつねにこのような心をも[つ]ことである」

結婚当初、夫と私は友人たちと一緒に住んでいました。彼らとおしゃべりをしたり、行動をともしたりするうち、夕方の時間は忙しく過ぎていき、だれもが夜遅く床に就いていました。毎日聖典を読むという目標が達成されていないことを気に留めていながらも、眠くてできません。そこで私たちは、電気をつけてスーツケースをかき回し標準聖典を取り出す代わりに、横になって交替で自分の好きな聖句を分かち合うことにしました。

「ただ願わしいことは、彼らがつねにこのような心をもってわたしを恐れ、わたしのすべての命令を守って、彼らもその子孫も永久にさいわいを得るにいたることである。」(申命5：29) この聖句を聞いたのはその時が初めてでした。

そのささやくような声の調子から、夫がどれほど心からこの聖句に真実でありたいと願っているかわかりまし

た。私たちがこのような心を持ち、子孫とともに永久に幸いを得るに至ることが夫の願いであるとわかったのです。今でも、私たちの居間の壁には、この聖句が額に入れて飾ってあります。幸福な永遠の家庭を築くための我が家の指針となっているのです。

女性への贈り物——「心に知恵ある女たち」

私は箴言に登場するふたりの女性の違いをいつも心に留めるようにしています。箴言には、22もの節にわたって「宝石よりもすぐれて尊い」徳高い女性のりっぱな行ないと特質が称賛されています。(箴言31：10-31)しかし、これと対照的なのが、同じ箴言の第21章19節の聖句です。「争い怒る女と共にいるよりは、荒野に住むほうがましだ。」

旧約聖書には、信仰あつく徳高い模範的な女性が数多く登場してきます。私は古代イスラエル時代の「心に知恵ある」女性たちを尊敬しています。(出エジプト35：25参照) まだ胎内にいた双子の子供から、ふたつの国民が分かれて出るという主の啓示を受けたりベカを尊敬しています。(創世25：21-23参照) 予期せぬ方向に発展したラケルの7年にわたる交際期間を考えるとため息が出ます。(創世29：18-28参照) 律法に対するサラの忠実さには驚嘆させられます。(教義と聖約132：34参照) 子供を授かるよう願ったハンナを思うと涙が込み上げてきます。(サムエル上1：4-16参照) デボラの指導力(士師4-5章参照)、主の使いと語った時に示したサムソンの母の信仰(士師13章参照)には目を見張るものがあります。イヴが示した無私の精神(モーセ5：11参照)、エステルへの勇気(エステル4-5章参照)、そしてルツの献身(ルツ1章参照)に倣いたいと思います。アビガイルと同じような生き方をしたい、彼女と同じように「賢くて美しい」(サムエル上25：3参照)女性になりたいと願っています。

言葉を手話するばや足を患ったアサの話、競争と戦い、従順な心、模範的な女性など、旧約聖書は、人生のそれぞれの節目にあつて、時宜にかなった贈り物を与えてくれました。奇跡的な方法で保存されてきたこの贈り物は、容易に私たちの手に入るのですが、そこには次のようなはり紙がしてあると言っているいかもかもしれません。「よく注意して耳を傾けること。——現代イスラエルへ。古代イスラエルより。」□

すべての者

プレント・A・バーロー

活発で有意義な
話し合いを通して、
より質の高い
レッスンを行なう。

人の教師を指名し、すべての人々一度に口利きたらしめずして一度に一人を語らしめ、他の人々は皆その言うところを聴くべし。すなわち、すべての人々語るや以てすべての者相互に啓発し、また人々をして互いに同様の特権を有たしめんためなり。」(教義と聖約 88:122)

話し合いは、効果的に教えるためのひとつの手段です。生徒が、知識を得て学んでいく過程をみずから味わうことによって、レッスンにも活気が出てきます。

救い主が地上におられた時、質問をしながら福音を教えるという方法をよく用いられました。「罪の女」と呼ばれた女性が主に触り、涙で主の足を洗ったことがありました。主がこの女性の行為を容認されているのを見て、パリサイ人のシモンは主を責めました。この時、主はふたりの債務者のたとえ話をされました。(ルカ 7:36-50参照) ひとりには50デナリ、もうひとりには500デナリをある金貸しに借りていました。ところが、ふたりが返せなかったで、その金貸しは寛大にもふたりとも赦してやりました。そこでイエスはシモンにこうお尋ねになりました。「このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか。」(42節)

教会ではクラス全員が参加できるレッスンがより望ましいとされています。1994年版福音の教義クラス教師用手引きには、次のような提案がされて

あなたがワード部で、福音の教義クラスの教師に召されたとします。早速、テーマに基づいて資料を調べることに多くの時間を費やし、レッスンの準備をします。ついに日曜日になり、あなたは自信を持ってレッスンを始めます。ところが30分もすると、テキストにあるとおりに聖典を読み、話をしているというのに、あくびをこらえる人や、ぼーっとしている人たちが目についてきます。あなたのレッスンの一体どこがいけないのでしょうか。主は、教室で福音を教えるときの原則を示されています。「**汝らの中に一**

が語るとき

います。「あなたは教師として、講義形式のレッスンをするのはなく、生徒が参画できるように助けなければならない。生徒は、祈りをもって聖句を学んでくれば、互いに教え導くことができるはずである。(教義と聖約88：118, 122参照)生徒の参画があれば、クラスにみたまを招くことができ、生徒を啓発して霊的な原則に従って生活するように導くことができる。」(p. vi)

クラス全員をもっと効果的にレッスンに参画させるために次の方法を試してみてください。

よりよい話し合いをするためには

話し合いを始める前に、どのような結論に導いたらよいかを具体的に考えます。どのような知識を提供したらよ

PHOTOGRAPHY BY STEVE BUNDERSON



いか。どのような概念を生徒から引き出したか。また、どのような概念を生徒に教えたいか。これらの項目を事前に紙に書き出してください。それによってあなた自身が、教えたい概念をはっきりとまとめ、参加者からそれに基づいた意見を引き出すことに的を絞ってレッスンができます。

生徒を話し合いに参加させるために最もよく使われるのは質問をすることですが、これにはさまざまな方法があります。

1. 答えがいくつかあるような全般的な質問をしてください。例——「定期的に聖典を読むうえでどんなことが

役立っていますか。」

皆に共通する質問をすれば、自分が指されるかもしれないと思って、全員がその質問について考えるからです。質問をしてからは、意見を述べたような人を指すようにします。

2. 全般的な質問をし、少し時間を置いてから、ひとりの人に答えてもらいます。例——「結婚生活で特に助けとなった聖句は何ですか。」(間を置く)「ビル、何か聖句が浮かんで来ましたか。」

この種の質問をする前に、だれかに答えてもらうつもりであることを付け加えておくとよいでしょう。そうすれ

ば、ほとんどの人が発言することを考え始めるでしょう。

3. 特定の人にひとつの具体的な質問をします。その際、相手の感情を害したり、当惑させたりすることのないように、細心の注意を払わなければなりません。例——「ジョンソン兄弟、あなたに17歳になる息子さんがいたとして、もし彼が家庭の夕べよりも友人と映画に行くことを望んだら、あなたならどうしますか。」

個人的な意見を求める質問に答えるのをためらう人に、話し合いに参加してもらうには、「はい」か「いいえ」で答えられるような聞き方をするのもひ



とつの方法です。例——「ジェンセン姉妹、聖典の勉強に最も適した時間は、朝だと思いませんか。」

「はい」か「いいえ」で答えた後も、相手がもう少し話したいことがあるかどうかを判断し、なさそうな場合はレッスンを進めます。

4. クラスを3人から5人のグループに分けます。話し合いのテーマや質問をひとつ割り当てます。どのグループにも、男性と女性が入るように分けてください。用意するテーマや質問は、理解しやすく、レッスンの流れにそった内容にしてください。前もって、だれかひとりにグループで出された意見や結論を発表してもらうことを言っておきます。例——「よりよい家庭の夕べを行なうための方法を3つ挙げてください。」

グループ分けして話し合いを行なう方法は、レッスンの時間がじゅうぶんに取れる場合に限られます。また、この方法で話し合いを行なった場合、必ず、各グループの発表の時間をじゅうぶんに取るようにしてください。そして、グループで出されたさまざまな意見をまとめるために、ひとつの見解、引用文、または聖句でレッスンを締めくくるようにしましょう。

注意すべきこと

講義形式から話し合い形式にレッスンを切り替える場合、教師が生徒全体を統率したり、レッスンの流れをコントロールしたりできなくなることがあります。たとえば、特定の生徒ばかりが意見を述べがちな場合がそうです。こういった生徒はほかの生徒に比べて

特に積極的なため、あるいは何か特別な必要を感じているためにそうしているのかもしれませんが。

さらに、話し合いで出た生徒の意見が的外れのものであったり、間違っていたり、福音の原則や教えようとしている概念とは正反対の場合もあります。このようなときはレッスン時間が、レッスンとはほとんど関係のないテーマについて誤りを訂正したり、話し合ったりすることに費やされてしまうことが往々にしてあります。

ときには生徒か教師、あるいは双方がテーマから脱線してしまうこともあるでしょう。いつの間にか、初めの質問とはほとんどかままったく関係のない概念について話し合っているのです。話し合いが長引いたり、特定の人ばかりが発言したりすると、ほかの生徒はあまり快く感じないでしょう。

このような問題を解決する鍵は、話し合うテーマを常に明確にし、生徒がそのテーマをずっと心に留められるよう気を配ることです。

話し合いのよい点

話し合いをすることの最大の利点は、講義に比べて生徒も教師も学習する過程にともに参加できることです。レッスンの時間中ずっと、学ぶ意欲を与え続けられる技術を備えた教師はまれです。レッスン時間が1時間を超える場合はなおさらです。

講義や話をしている間、生徒が集中して聞いていられる時間は、わずか20分程度だと言われています。この時間を過ぎると、生徒の興味や学習意欲は大幅に減少します。このとき教師は、

生徒の学習意欲を取り戻すために、違った方法を用いなければなりません。クラスで話し合う方法を用いれば、生徒は個々の経験を通して学んだことを分かち合うことができ、それによって新鮮な興味を持ち続けることができます。

ときには、個々の意見や経験を分かち合っているうちに、生徒が、教師用あるいは生徒用の手引きに書かれた概念よりも優れた考えを述べたり、奥の深い疑問を投げかけたりする場合もあるでしょう。そのような疑問は、クラス全体でさらに話し合いを進めるのにかっこうの題材となります。こういった雰囲気を作り出すなら、私たちは「互いに……教うべし」（教義と聖約88：118）という主の訓戒に従っていることとなります。

生徒を話し合いに参加させることは、もうひとつの学習を行なっていることにもなります。教師として、生徒一人一人について、また彼らの関心事やひとつのテーマに関する彼らの疑問について知ることができるのです。生徒たちの真の必要と関心に合致した話し合いができたとき、教師はよい働きをしたこととなります。

このように、よく準備された質問をすること、適切な話し合いの場を設けることは、福音を教えるに当たってきわめて重要なことです。皆さんも以上の提案にそってレッスンを行なってみてください。そうすれば、きっとより効果的に、教える者も学ぶ者も「すべての人々語〔り〕」、「互いに同様の特権を有〔つた〕」（教義と聖約88：122）すばらしいレッスンができることでしょう。□

水に漂うパンフレットに心を向けたことから、ガマリエル・アルシデス・バスケスは新しい人生を歩みだした。それは彼ばかりでなく、奥さんのマグダ・プリシラと3人の子供たちの人生にも波及していった。写真は、1990年の初めにバスケス夫妻が子供たちのうちふたりとともに撮ったもの。



水に漂う パンフレット

ガマリエル・アルシデス・バスケス

1977年9月、当時19歳だった私は学校の教師になるために、グアテマラのケサルテナンゴで学んでいました。ある日の午後、家に歩いて帰る途中、雨水の小さな流れが私のアパートの方に向かって通りを下っているのに気づきました。その流れは1枚の紙切れを運んでいました。ほんの気晴らしのつもりで、その紙と同じ速さで歩いてみることにしました。そしてアパートに着くと、その紙を拾い上げました。

それはパンフレットでした。そこには「イエス・キリストによって組織された教会」というタイトルが記されていました。このタイトルを、私は生涯忘れないでしょう。かつて私は、イエス・キリストが組織された教会を見つけることにとっても興味を持っていました。多くの教会について探求してみたのですが、どの教会にも加わりませんでした。そしてついには探求をあきらめてしまったのです。しかしその時、パンフレットのタイトルを読むなり、どういう訳か、自分が真実の教会を見つけたとわかったのです。パンフレットの裏面には、「末日聖徒イエス・キリスト教会」という名前がありました。こうして私は、その名前の教会を探求ことにしました。

10月に学校が終わると、私は故郷のリオブランコに戻って3カ月の休暇を過ごしました。その間、とうもろこしの収穫の手伝いをしました。ある日、おんぼろのトラックで丘を上っている

と、ブレーキが故障してしまいました。トラックはガタガタと揺れて道から外れ、私は溝に投げ出されました。そこへトラックが迫ってきて、危うく頭をひかれるところでした。動転しながらも、もしさっき死んでしまっていたらどうなっただろうという思いに駆られました。

1月に学校が始まり、私はケサルテナンゴに戻りました。この町に3年も住んでいるのですが、そこで末日聖徒の教会を見たことなど一度もありませんでした。ある日曜日、もしその教会がこの地にあるのなら、なんとしても見つけ出そうと決心しました。朝早く起きると、会う人々全員に教会の場所を知っているかどうか尋ね始めました。最初は「知らない」という答えしか返ってきませんでした。何度か間違った方向を教えられたりもしました。しかし3時間後、ついに集会所の場所を突き止めることができ、私は文字どおり、そこに向かって駆けて行きました。

あまり建物が美しいので、この教会は金持ちの人たちだけのものかもしれないと不安になりました。内気な性格の私は、礼拝堂の後ろの方の席にそっと腰を下ろしました。そこにはだれも座っていませんでしたし、だれも私に話しかけてきませんでした。しかし集会そのものはとても気に入りました。これまで地上のどんな場所でも感じたことのない雰囲気がそこにはありました。

バプテスマを受けたばかりのころ、リオブランコには私以外に教会員がいなかったので、孤独を感じました。

この時、もし教会が真実であるなら、やはりそのことをほかの人々にも伝えるべきなのだと思いました。

私は仕事が終わると毎日、友人や親戚しんせきの家を訪ねて福音を伝え始めました。

間もなく、バプテスマを受ける準備のできた人は8人となりました。

次の日曜日にも集会に参加しました。その時私は、もし説教者が人々に向かって、「前に進み出てキリストを受け入れるように」と招いたとしたら、真っ先に自分がそうするだろうと考えていました。しかしだれも、前に出て来てくださいと招いたりもしませんでした。3人の会員が短い証あかしを述べただけでした。ここの教会はよその教会と随分違うものだ、と感じました。しかしそこが気に入りました。不幸にも会員は依然としてだれひとり私に気づいてくれませんでした。そこで、もう一週だけこの教会に集うことにしました。もし話すことのできる人がひとりもいなければ、とても出席し続けることはできないと思ったのです。少なくとも、大切な美しい思い出ぐらいにはなっただけでしょうが。

3回目の日曜日の集会も、同様に満足のいくものでした。すべての集会が終了した後、皆が楽しそうに話をしながら帰り始めました。私は通路にあるベンチにひとり腰を下ろしました。もう二度とここに来ることもないだろうと思うと泣きそうになりました。その時です。身なりのきちんとした金髪きんぱつの青年が私の隣に座ったのです。その青年は、たどたどしいスペイン語で、私が教会員になってからどれくらいになるのか尋ねてきました。

「会員ではありません。ただ参加させてもらっただけです」と答えました。すると彼はすぐにメモ帳を取り出して私の住所を聞いてきました。

「どうして住所が必要なんですか。」

「あなたと友達になりたいのです。」

そして、もっと教会についてたくさん

知ってもらいたいんです」と彼は説明してくれました。

大喜びで、その青年の招きを受け入れられました。こうして宣教師たちから福音を学び始めました。私は多くの質問をしました。宣教師が私の質問にいつも答えられたわけではありませんが、次の日には必ず答えを用意して訪ねてくれました。学校がっこうのみんなは、私のしていることを知るとあざ笑いました。また、ほかの教会に属している私の家族にも、ばかなまねはやめるように何度も説得されました。しかし私は、宣教師から福音を学び続け、ついにはバプテスマを受けたのです。

間もなく、監督から監督室に呼ばれ、伝道に行く準備をしてみないかと言われました。私は人一倍恥はにかみずかしがり屋だったので、とても困惑してしまいました。迷った末、返事を少し待ってもらうことにしました。

学年が修了し、リオブランコに再び帰省しました。しかし、そこには私以外に教会員がいなかったので、孤独を感じました。この時、もし教会が真実であるなら、やはりそのことをほかの人々にも伝えるべきなのだと思いました。私は仕事が終わると毎日、友人や親戚しんせきの家を訪ねて福音を伝え始めました。その人たちの何人かは教会に入りたいと思うまでになりました。私はジョン・F・オドナル伝道部長に電話をして、リオブランコにはバプテスマを受ける準備のできた人が8人もいることを伝えました。伝道部長は喜んで足を運び、手はずを整えてくれました。

監督と同様にオドナル伝道部長も私に伝道に出よう勧めました。私は、

その返事を長引かせる言い訳として、リオブランコには神権指導者がいないことを説明しました。そして、だれか神権者を派遣してくれたら伝道に行きます、と答えました。ところが、彼は実にその翌週、リオブランコにふたりの宣教師を派遣したのです。こうして私は、気の進まないまま宣教師申請書を提出することになりました。

予想していたとおり、伝道は大変な忍耐と労力を必要とするものでした。しかし伝道に出ると決めたことに後悔はしませんでした。私の父はすでに亡くなってしまいましたが、今では母も教会員であり、母の14人の子供たちのうちふたりを除いて全員が教会員です。兄妹きょうだいの4人はすでに伝道に行き、さらにふたりが伝道に向けて準備中です。また、私たちのほとんどが教会で何らかの召しを受けて働いています。

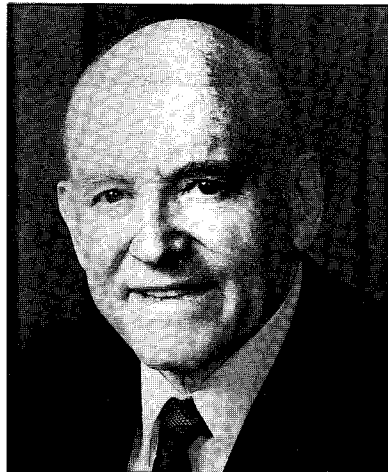
伝道を終えた後、私はリオブランコの支部長に召されました。5年後の1986年にはすばらしい祝福が私の人生にもたらされました。妻とグアテマラシティグアテマラシティで結婚したのです。現在、3人の子供たちがいます。1990年に支部がワード部になり、私は監督に召されました。ほかにもっとふさわしい兄弟がたくさんいると感じましたが、主は私を召されたのです。そのことを心に留め、全力を尽くしてこの召しを果たしてきました。

あの水に漂うパンフレットを見つけ、以来、美しく報いの多い経験をいろいろとしてきました。世の人々が権力や富を得るため奔走している一方で、私は平安と安全、幸福を見いだしてきたのです。□

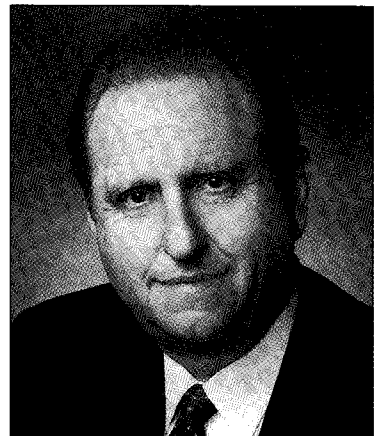
ハワード・W・ハンター長老 教会の大管長に聖任される



第一副管長
ゴードン・B・ヒンクレー



大管長
ハワード・W・ハンター



第二副管長
トーマス・S・モンソン

ハワード・W・ハンター長老（86歳）は、1994年6月5日、教会の第14代大管長に聖任され、任命された。ハンター長老は1959年から十二使徒定員会に籍を置き、1988年からは同定員会の会長として仕えた。ハンター大管長は、去る5月30日に亡くなったエズラ・タフト・ベンソン大管長の後を受けて就任した。

6月6日に行なわれた特別記者会見の席上、ハンター大管長はみずからの生活を主に捧げ、全力を尽くすと述べ、教会員にも「互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜に、忍耐強く、赦し合う」ように勧告した。

また次のようにも語った。「私が心から望んでいるのは、すべての教会員が神殿に参入するふさわしさを身につけ、「神殿に頻繁に参入し、神殿を愛する民になることです。」

ハンター大管長は第一副管長にゴードン・B・ヒンクレー長老を、また第二副管長にはトーマス・S・モンソン長老を選んだ。ふたりともベンソン大管長の下で同じ責任を果たしていた。

ハンター大管長によって空席となった十二使徒定員会会長には、同じくゴ-

ドン・B・ヒンクレー長老が召され、任命された。またボイド・K・パッカー長老が、同定員会の会長代理として働くように召された。

ヒンクレー副管長は記者団を前に、ハンター大管長とともに働くことが特別な名誉であり、特権であると語り、「ハンター長老とは過去33年間にわたって親しい交際を続けてきました」と述べた。

「ハンター長老はきわめて有能な方であり、親切で、品位があり、主のみ業に完全に献身していらっしゃいます。全世界にこのみ業を推し進めるうえでなすべきことはたくさんあります。敬愛するこの指導者と一緒に働くに当たり、最善を尽くしたいと思っています。」

モンソン副管長はハンター長老との長年にわたる交際に触れ、ハンター長老に向かってこう語りかけた。「私はあなたがきわめて有能な方であり、深い憐れみの心を持った方であることを、すべての人に知ってほしいと思っています。あなたは飢えた人々、家を失った人々を心にかけている指導者です。そして、主と同じ精神をもって、いつ

も人々を主の方向へ押し上げようとする高い願いを持っていていらっしゃいます。」

新しい大管長会

ハワード・W・ハンター大管長は、1907年11月14日にアイダホ州ボイスで生まれた。少年時代は活発にスカウト活動に参加し、アイダホ州ではイーグル章を受章したふたり目の少年になった。ハンター長老は音楽にも興味を示し、いくつもの楽器に熟達した。

1928年にはカリフォルニア州に移り、そこで昼は働き、夜は学校に通って、最終的にはロサンゼルス¹のサウスウエスタン大学ロースクールで法学の学位を得た。後に、カリフォルニア²法曹協会の一員となり、法人の顧問弁護士として活躍した。ユタ州³に移ってからは、ユタ州法曹協会に加入を認められた。

1959年に十二使徒定員会に召されるまで、ハンター長老はカリフォルニア州でさまざまな教会の召しを果たした。その中には、監督、高等評議員、ステーク部長などの召しがある。ステーク部長時代には、南カリフォルニア福祉地

6月6日に行なわれた新しい大管長会の記者会見で。ハワード・W・ハンター大管長(中央)、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長(左)、トーマス・S・モンソン第二副管長(右)。

十二使徒定員会会長代理
ボイド・K・パッカー



区の責任者を務め、ロサンゼルス神殿の建設に際しては指導的な役割を果たした。

ハンター大管長は1931年にクララ・メイ・ジェフス姉妹と結婚し、3人の息子がいたが、長男は幼児期に亡くなった。ハンター姉妹は1983年に亡くなり、ハンター長老は1990年にバーニス・イーガン・スタントン姉妹と再婚した。

ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、1910年6月23日ソルトレークシティで生まれた。後年同地でユタ大学を卒業した。イギリスで2年間専任宣教師として働いた後、さまざまな教会の召しを果たし、1958年に十二使徒補助に召された時には、ミルクリーク東ステーク部のステーク部長であった。十二使徒定員会には1961年に召され、1981年には副管長に召されている。翌年、スペンサー・W・キンボール大管長の第二副管長に指名され、キンボール大管長が亡くなると、エズラ・タフト・ベンソン大管長の第一副管長に召された。

教会幹部に召されるまで、ヒンクレー長老は教会の広報プログラムを20年間にわたって指導し、中央伝道委員会の幹部書記を7年間務めた。また最近、ボーイスカウト・アメリカ連盟の最高章であるシルバー・バッファロー章を受章している。

ヒンクレー長老はマージョリー・ペイ姉妹と結婚し、5人の子供がいる。

トーマス・S・モンソン副管長は、1927年8月21日にソルトレークシティで生まれた。モンソン長老はユタ大学を卒業して経営学の学位を取得し、

同大学の経営学部の教職員として働いた。後年、ブリガム・ヤング大学からMBA(経営管理学修士)を取得した。

第二次大戦の終わりごろ、モンソン長老は一時期アメリカ合衆国海軍に入隊した。モンソン長老は出版、印刷業界で成功を収め、教会でも監督や伝道部長を含む数多くの召しを果たした。1963年に十二使徒定員会に召された時は、テンプルビューステーク部のステーク部長であった。そして1985年、ベンソン大管長の第二副管長に召された。

1969年以来、モンソン長老はボーイスカウト・アメリカ連盟全国理事会の理事のひとりであり、アメリカ合衆国のスカウト最高章であるシルバー・バッファロー章を受章している。

モンソン長老はフランシス・ビバリー・ジョンソン姉妹と結婚し、3人の子供がいる。

十二使徒定員会の会長代理となったボイド・K・パッカー長老は、1924年9月10日にユタ州ブリガムシティで生まれ、第二次大戦ではパイロットとして働いた。

教育専門家であるパッカー長老は、最初はユタ州オグデンにあるウェーバー州立単科大学で学び、ブリガムシティで市民活動や地域行事に活発に従事した。ユタ州立大学で学士号と修士号を取得し、ブリガム・ヤング大学で博士号を得た。教会教育部のスーパーバイザーを務め、1961年に十二使徒補助に召され、後に伝道部長としても働いた。そして1970年、十二使徒定員会に召された。

パッカー長老はドナ・スミス姉妹と結婚し、10人の子供がいる。

変わらぬ証^{あかし}

新しい教会の大管長に就任したハワード・W・ハンター長老は次のように語っている。「最愛の友であり兄弟であったエズラ・タフト・ベンソン大管長が亡くなってから、私たちの心は大変感じやすくなっています。私たちはベンソン大管長を深く愛しており、ベンソン大管長がともにいてそのすばらしい勧告を聴けた日々を、懐かしんでいます。ベンソン大管長が亡くなって以来、新しい責任が私の肩に置かれたという意味で、私はベンソン大管長の不在を個人的に特に強く感じています。私は長い間涙を流し、このたび強くことになった高く神聖な召しにふさわしい者となれるように、熱心に天父に祈り求めました。

この数時間、そしてこの数日間、私に最大の力を与えてくれたのは、これが神のみ業であって人の業ではなく、イエス・キリストが^{かしら}この教会の権威を持った生ける頭であり、主がみ言葉と行ないをもって導いてくださっているという、変わらぬ証です。私はみずからを捧げ、力のかぎりを尽くし、全身全霊で主に仕えたいと思います。

私は自分の妻と家族に心からの愛を捧げたいと思います。彼らは私に大きな慰めを与え、前途に横たわるこの新しい務めを前にして励ましを与えてくれました。また、ゴードン・B・ヒンクレー副管長とトーマス・S・モンソ

ン副管長にも愛と感謝をお伝えします。彼らは私の副管長として働く召しを受け入れてくださいました。さらに、十二使徒定員会のかたがたとそのほかの教会幹部のかたがたにも愛と感謝をお伝えします。私はこれらのかたがたを心から尊重し、彼らに対して深い愛と尊敬の念を抱いています。

世界のあらゆる国々の教会員とあらゆる地域の人々に、私の愛をお伝えします。

私には、神の戒めを守り、その祝福を最大限に受けようと努める教会員の皆さんに伝えたい勧めがふたつあります。第1に、主イエス・キリストの生涯と模範、特に主が示された愛と希望と慈悲に、これまで以上の注意を払って生活するようすべての教会員にお勧めします。

私たちが互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜で、忍耐強く、赦し合えるように祈っています。私たちはお互いに対して高い期待を抱いていますし、すべての人は進歩できるのです。世の人々は神の戒めにそったもっと規律ある生活をするように求めています。しかし私たちがそれを奨励する方法は、主がわびしいリパティーの牢獄で予言者ジョセフ・スミスに語られたように、『説教と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛と……偽善にあらざり奸智にあらざり……ものによる』(教義と聖約121:41-42)のです。

罪を犯した人々、心に傷を負った人々にはこう伝えたいと思います。戻って来てください。傷つき、もがき、恐れを抱いている人々にお伝えします。私たちは皆さんの味方です。私たちに皆さんの涙をぬぐわせてください。真偽の見分けがつかず、四方を誤りに取り囲まれている皆さんに申しあげます。あらゆる真理の源である神のみもとへ、また絶えざる啓示を持つ教会の元に来てください。戻って来てください。私たちとともに立ち上がってください。前進し、信じ続けてください。何の心配もありません。すべては将来にわたってよくなるでしょう。末日聖徒イエス・キリスト教会で皆さんの前に用意された祝宴の席に着いてください。その席を設けられた良き羊飼いに従うように努めてください。希望を持ち、信仰を

行使し、キリストが持っておられる純粹な愛すなわち仁愛を受け、そして与えてください。

2番目に教会員に勧めたいのは、その同じ精神をもって、主の宮居を、教会員であることの崇高な象徴とし、最も聖なる誓約を交わす至高の場所として確立することです。神殿に参入するふさわしさをすべての教会員が身につけること、それが私の心の奥底からの願いです。神殿が近くにないために、すぐにあるいは頻りに参入できないとしても、すべての成人会員が有効な神殿推薦状の発行を受けるふさわしさを身につけられるように、また推薦状を

教会幹部、実業家、著述家

スターリング・W・シル 長老、91歳で死去

名 名誉教会幹部のスターリング・W・シル長老が、1994年5月25日、老衰のためソルトレークシティの自宅で亡くなった。91歳だった。

シル長老は1954年4月から1976年10月まで十二使徒評議員会補助として働き、1976年には七十人第一定員会に召され、1978年に名誉教会幹部となるまで、その務めを果たした。

1924年から1926年まではアメリカ合衆国南部諸州で専任宣教師として教会のために働き、後年、ステーキ部の高等評議員や監督を務め、1951年から1954年までは中央日曜学校管理会会員



所持できるように願っています。

神殿に頻りに参入し、神殿を愛する民になろうではありませんか。時間と資金と個人の都合が許すかぎり頻りに、速やかに神殿に行きましょう。親族の死者のためだけに参入するのではなく、神殿での礼拝によって得られる個人的な祝福を求め、神聖で奉獻された壁の内部で得られる安全と聖めを得るために参入しましょう。神殿は美しい場所であり、啓示を授かる場所であり、平安の宿る場所です。そこは主の宮居であり、聖きを主に捧げる場所です。同時に、私たち自身にとっても聖なる場所であればなりません。」□

の責任を果たした。教会幹部に召される前は、保険業界で優れた業績を残し、地域奉仕団体の指導者でもあった。

シル長老は講演家、著述家としても人気を博し、霊的、知的成長に役立つ33冊の書物を著わした。

1960年から1977年までは、ソルトレークシティのラジオプログラム「テンプルスクウェアの日曜日の夕べ」で多くの人に親しまれ、その声はアメリカ合衆国内の約370局とカナダ、オーストラリアでも放送された。

長老は説教や著書の中で、長年にわたって蓄積した膨大な量の啓発的な抜粋、話、賛美歌、詩などを紹介した。1978年4月の総大会でシル長老はこう語っている。

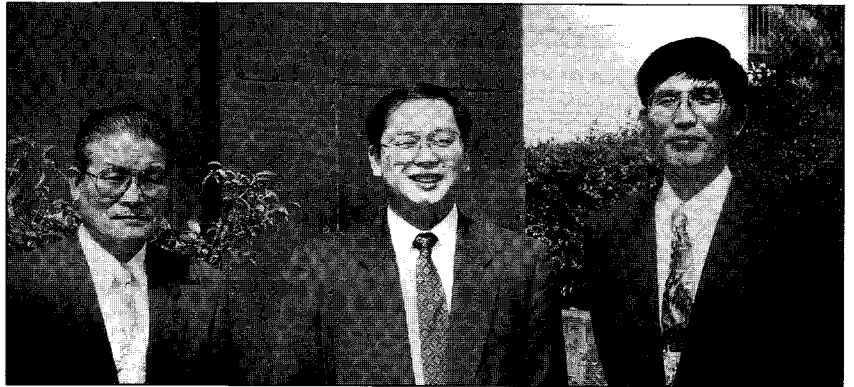
「手と心に信仰と熱意の大いなる思想を持てば、それによって全人格が変わるのである。

否定的なことを考えれば、否定的な心が育つ。墮落した思いを抱けば、墮落した心が育つ。またその一方で、神のような思い、日の光栄の思いを抱けば、日の光栄の心が育〔つ。〕」

スターリング・W・シル長老は、1903年3月31日にユタ州レイトンで、ジョセフ・アルバート・シルとマリエッタ・ウェリング・シルとの間に生まれた。通常の学校教育を経た後、ユタ州立大学ならびにユタ大学に学んだ。1929年にドリス・メアリー・ソーンリーと結婚した。遺族には夫人と、娘と息子がひとりずついる。(もうひとりの息子がいたがすでに亡くなっている) □

再組織された大阪東ステークス部長会

去る3月13日、アジア北地域会長会第一副会長韓仁相長老の下に開催された大阪東ステークス特別大会で、1992年5月よりステークス部長の責任を果たしてきた田中良一兄弟が解任され、新たに芥正章兄弟が召された。第一副ステークス部長には、山内威彦兄弟(写真右)が、第二副ステークス部長には、柏山歳夫兄弟(写真左)が召され、その任に当たる。



「この教会が好きだったんです」

大阪東ステークス部長 芥 正章

「そこで私ニーフアイは、私の父に『私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである』と言った。」(Iニーフアイ3:7)

この聖句が、頭の中の紙にタイプライターで印字されていくように浮かんできたことがあります。

「ステークス部長に召します」との韓仁相長老の英語を聞いた時、正直耳を疑い、松田地区代表の通訳の日本語でもう一度確認しました。普通ステークス部長といえば、40代半ば以上で教会員歴が20年以上、社会的にも成功しただから見ても落ち着いた信頼の置ける神権者が召されるものだと思っていました。ですからその時、私の頭の中は真っ白になり、足は震えて、情けないほど困惑した状態だったと思います。廊下を歩く時、松田地区代表に肩を支えられて「だいじょうぶですか」と言われました。

1982年6月12日。宣教師から福音を学ぶようになって約3週間後、私は当時の京都第2支部(学生支部)でバプテスマを受けました。19歳でした。この教会を紹介してくれたふたりの宣教師に、今でも感謝しています。改宗し

て間もなく、支部長であった林兄弟に私はこう言われました。「教会をやめるのなら今のうちにやめた方がいいですよ。後で祝福をもらってからやめるより受ける罰は少ないですから……。」以後この言葉に何度も自己奮起させられました。

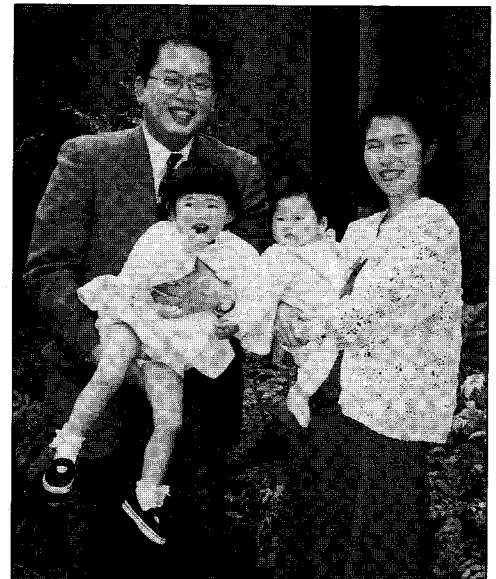
さて私は、監督や支部長の経験がないステークス部長です。でも初等協会の教師は足掛け8年やりました。私の教会員歴は約12年ですから、ほとんど初等協会の教師でした。現在、ステークス部内にいる青少年のほとんどは私の生徒たちです。

子供は必ず反抗期を迎えます。6、7年前、ある男の子がちょうど反抗期

のまっただ中で、集会中に奇声を上げたり、分かち合いの時間に部屋から飛び出して行ったり、手のつけられないような有り様でした。その日も、分かち合いの時間に奇声を上げ散々妨害したあげ句部屋を出て行こうとしましたので、私は廊下で捕まえました。すると廊下に寝転がってしまいました。だから私も廊下に大の字になって寝転がりました。彼はびっくりしていました。すると、そこへたまたまステークス部長が通りかかって「何してるんだ」と言いながらステークス部長室に入って行かれました。私は、その男の子と顔を見合わせて「やばいなー。入ろうか?」と聞くと、彼は首を縦に振って自分から部屋に入り、席に座って静かに分かち合いの時間を過ごしました。

芥正章ステークス部長の紹介

1963年香川県丸亀市生まれ。19歳でバプテスマを受ける。大手門学院大学経済学部卒。1990年、杉野伊久代姉妹と結婚し、現在ふたりの子供がいる。大阪東ステークス部茨城第2ワード部所属。不動産会社勤務。これまで、副ステークス部長、高等評議員、日曜学校教師、初等協会教師(星、CTR、勇者、開拓者クラス)、ステークス部宣教師を歴任している。



芥正章ステークス部長ご家族

「シンセシス」来日

2年後、私は彼の担任になりました。彼はすっかり成長していてクラスの中で一番の模範でした。私のおかげでよくなったとは思っていませんが、子供がいくら面倒をかけてきても、どんどん成長する姿を見る時、一時の苦勞などどうでもよくなって、すべてが報われたような気持ちになります。

今、私たちのステーキ部は、パイロットプロジェクトを行なっています。ステーキ部としてはたぶん日本で一番小さなステーキ部です。ワード部は6ユニット。各ワード部40人から50人。小人数のため、毎週の集会の運営自体が大変です。ひとりがこなす責任は以前よりも多くなりました。何もしなくてもよい会員がほとんどいなくなりました。つまりほとんどの会員が主の召しを忠実に果たさなければ、だれかにしわ寄せが行き、またひとりが何人分もの責任を担わなければ教会の組織運営がむずかしいということです。でも、できることしかできないので、目標を最少限に絞り込み、福音の原則に従って一致して頑張れば結果は後からついてくるとしています。

主はこの経験の少ない、年若い者にシオンのステーキ部を任せられました。韓長老とステーキ部長会がミーティングを行なった時、韓長老のおっしゃった言葉が思い出されます。「ジョセフ・スミスも初めから予言者のようではありませんでした。でも彼は予言者になりたいと思い、なろうと努力しました。モルモン経の翻訳も最初はウリムとトミムを使って翻訳しましたが、途中から使わないでも翻訳できるようになりました。それは彼が努力したからです。私も教会幹部になろうと努力しています。」

私は確かに若く経験の少ない若輩者です。今まで何度もくじけました。愚か者だと思っています。でもこの教会が好きだったんです。証も確かにありますが、それよりも教会が好きだ、神様が好きだ、イエス様の教えが大好きだということが今の私を築き上げてきたと思っています。神様は確かに生きていらっしゃって、末日聖徒イエス・キリスト教会はイエス・キリストの教えの岩の上に建てられた真実の教会であると証します。(あくた・まさあき)

BYU (プリガム・ヤング大学) の学生ジャズバンド「シンセシス」が、4月末に日本に初来日しました。公演は名古屋、岐阜、静岡、東京の7会場で行なわれ、ジャズファンのみならず、多くの聴衆に感動を与えました。

20人のメンバーから成る「シンセシス」はスイング、ブルース、ゴスペル、ロック、ラテン、フュージョンなどのさまざまなスタイルのジャズをこなし、常に人々を魅了してきました。そして、アメリカ、カナダ、スイス、フィンランド、オランダなど各国のジャズフェスティバルはもちろん、1990年春には、アメリカのジャズバンドとしては初めて、旧ソビエトの諸都市で公演を行なうなど、多くの国際舞台で活躍しています。

シンセシス沼津公演

1994年5月12日、静岡県沼津市民文化センターで開催されたBYU (プリガム・ヤング大学) 「シンセシス」のジャズコンサートは、約750人が来場し、パワフルなサウンドに全員の手拍子が加わり、感動的なひとときをもたらしました。

BYUのジャズバンド「シンセシス」は20人の男女で構成され、演奏者たちは毎年厳しいオーディションを受け選ばれます。そして、将来は音楽家や音楽教師を目指しているメンバーも多くなります。指揮者のレイ・スミス教授は、かつて「シンセシス」でアルトサクソフオンを演奏し、インディアナ大学で音楽の博士号を取得され、現在はBYUで木管楽器の教授およびジャズ・スタディのディレクターを務めています。

今回、彼らのアンサンブルに接した人たちから寄せられた100枚を超えるアンケートは、コンサートの様子を率直に伝えています。

「今の季節の新緑のようなさわやかな演奏会でとても気持ちがよかった。」
「メンバーは学生らしく身なりがきちんとしていて、とても好感が持てます。」
「アメリカという国のよさが伝わってきた。」
「サウンド、アンサンブル、リズム、みんなすばらしく、胸の奥がジーンとしてきました。演奏中涙があふれそうになりました。ほんとうにすてきな時間を過ごせて幸せです。」

来場者の8割以上が教会外の方で、ユタ州やプロボ、BYU、末日聖徒イエス・キリスト教会、モルモン教会という言葉初めて聞いた方も多かったようでした。来場者はコンサートを新聞やポスター、チラシ、プレイガイドなどで知り、チケットを購入された方や、コンサートに協賛してくださった企業の社員、静岡県吹奏楽連盟の中学生、高校生、後援していただきました沼津市教育委員会、沼津国際交流協会のかたがた、沼津盲学校の生徒および教師のかたがたなど、その構成は幅広いものでした。

コンサートの開始90分前には、現在演奏活動をしている学生のかたがたを中心に、演奏技術の向上のための公開クリニックを50分間行ない、とても好評を得ました。

翌日13日、午前9時には「シンセシス」のメンバーと通訳兼ガイド役のワットカット兄弟とともに河口湖、富士山5合目、白糸の滝を観光案内しました。バスの中でメンバーは、ともに祈り、証をし、聖典を読む人、日記を書く人、今晚のために楽譜を書く人、音楽を聞く人、前夜のコンサートについて話す人がいて、私の経験した日本人の観光バスの状況とのあまりの違いにカルチャーショックを受け、とてもうれしくなりました。

そして、午後7時より富士ワード部でファイヤサイドが開かれました。ファイヤサイドには前夜のコンサートに来

てくださった方も多く見受けられました。

若槻貞次郎^{わかつきさだじろう}ステーク部長の歓迎のあいさつの後、静岡ステーク部音楽協会の合唱団が、シンセシスの音響技術者で編曲者でもあるホローマン兄弟のピアノ伴奏により『Oh That I Were An Angel (ああ、私が天使になって)』を歌い歓迎しました。シンセシスのメンバーはわかりやすい福音の話と証をし、その後賛美歌の中からサクソホン、トロンボーン、トランペットの各アンサンブルをメンバーの話を変えながら披露しました。合唱団のメンバーにとってうれしかったのは、モーツァルトの『アベ・ベルム・コルプス』をシンセシスの金管アンサンブルと共演したことでした。何よりも感動的だったのは、レイ・スミス教授のソプラノサクソホンの演奏でした。また、シンセシスのメンバーはコーラスも披露してくれました。最後には賛美歌『神の子です』の1番を日本語で歌い2、3番を全員と一緒に歌いました。参加者は神様のみたまを豊かに受けてとても幸せそうでした。

翌朝、9時にシンセシスのメンバーは次の公演地である東京へと向かいました。私は出発前に見送りとコンサートのアンケートを渡すためにホテルに行きました。別れるバスの中で私に『神よ、また逢うまで』を全員で歌ってくれた時の喜びは決して忘れないでしょう。

13歳からサクソホンを習い始め、32歳までの19年間吹奏楽を経験し、35歳になる今でも楽器と音楽を愛する私にとって、今回のシンセシスのコンサートの経験は、生涯忘れることのできない貴重な価値ある経験でした。シンセシスのメンバーの活動の中から数多くの模範を見ることができ、学ぶことが多くありました。あなたがたの光を輝かしなさい。あなたがたは光である。才能を生かすこと。真面目であること。いつでもどこにいてもイエス・キリストの証し人になること。人の喜びが自分の喜びとなること。人が必要としていることの中で自分の才能を生かして、できることから始めること。真面目と一生懸命の中に感動があること。栄光

を神様に帰すこと……。

今回のシンセシスのコンサートはステーク部長会をはじめ、沼津支部、富士ワード部のメンバーやその友人、静岡ステーク部音楽協会のかたがたのボランティア活動によって支えられました。また、沼津市教育委員会、沼津国際交流協会、静岡県東部吹奏楽連盟などの、数え上げればきりのない多くのかたがたのご理解と、ご好意によって支えられていたことに、心より感謝申し上げます。(レポーター：坂上洋一 静岡ステーク部高等評議員)

シンセシス東京公演

去る5月14日の土曜日、東京都品川区五反田の「ゆうぼうと簡易保険ホール」で、ブリガム・ヤング大学(BYU)のジャズバンド「シンセシス」の東京公演が開催されました。この公演はシンセシスの日本での公演旅行の最後を飾るコンサートとなり、1,400人以上の観客は午後6時からの2時間半、すばらしい演奏を堪能しました。

1930年代から最近までのビッグバンドの演奏した、ブルース、ラテン、ロックなどの曲が、指揮者のレイ・スミス兄弟のダイナミックかつ繊細な指揮により次々と奏でられました。予定の2時間半はあっという間に過ぎて、最後のナンバーの後は観客総立ちでの拍手となりました。そして、アンコールで『イン・ザ・ムード』を演奏した時に

は会場がスミス兄弟のリードする手拍子で一体となり、ムードは最高潮に達しました。また、アンコールのナンバーの最中に、協賛の企業から招待された品川区の障害を持つかたがたから、左足の不自由なスミス兄弟に花束が手渡されました。スミス兄弟のエネルギーッシュなステージを見て、障害を持つかたがたも勇気づけられたようでした。また、このコンサートはユニセフのためのチャリティーコンサートとして開かれましたので、来場者からの寄付金がコンサート後にユニセフの代表者に手渡されました。回収したアンケートを見ますと、ほぼ全員の方がシンセシスの演奏のすばらしさに驚き、とても満足したとの回答があり、またこのコンサートを見て、BYUに関心を寄せた非教会員の方もいました。

翌日の日曜日には、吉祥寺の東京ステーク部センターで、アジア北地域会長会のソレンセン会長と島袋副会長をお迎えしてシンセシスのファイヤサイドが開かれました。午後4時から1時間半にわたり、神聖な音楽を通して、私たちはイエス・キリスト^{あがな}の尊さと福音のすばらしさを思い起こすことができました。特に、レイ・スミス兄弟独奏の、『おお、聖なる贖い主よ』という曲は出席者の魂に浸み入り、キリストの贖いに対する感謝と喜びの念を私たちの胸に満たしてくれました。

最後にお話しされたソレンセン会長は、マタイによる福音書第5章14節の「あなたがたは、世の光である。山の



ゆうぼうと簡易保険ホールで行なわれた「シンセシス」最終公演

上にある町は隠れることができない」という聖句を引用し、シンセシスのすばらしさを褒めていらっしゃいました。私たちも、多くの犠牲を払って来てくれたシンセシスのメンバーがキリストの光を放ち、日本の民のためにたくさ

んの善をなしてくれたことに感謝し、またシンセシスを含むBYUのパフォーミング・グループがまた来日してくれるのを楽しみにしています。(レポーター：永野卓司 東京ステーションキ部高等評議員)



家族と友人に囲まれて。(越中姉妹は前列左から2番目。前列右からご主人と3人の子供たち)

計り知れない 神のみ業の中で

東京北伝道部長野地方部長野支部の越中芳枝姉妹は21歳の時バプテスマを受け、3年前に東京から家族5人で長野県鬼無里村へ移住。詩作を高校時代より始め、昨年、「第3回長野文学賞」(長野日報主催)の詩の部門賞を受賞しました。

東京北伝道部長野地方部長野支部 越中芳枝

「いってきます。」「おねえちゃん、いつてらっしゃい。気をつけてねえ。」毎朝6時50分、元気な声が山に響きます。この春1年生になった長女は、近所の子供たちと一緒に1時間ほど歩いた所にある小学校に通っています。ここは長野県の北部、白馬村と長野市の間にある山間の村です。人口は約2,700人、鬼の無い里と書いて鬼無里と呼ばれているこの村に移り住んで3年になります。

雑誌の小さな記事を見つけ、家や畑を貸してくれるというこの村に、初めて来た時は驚きの方が大きかったことを思い出します。どこまで行ってもカーブの多い山道が続き、深い谷や人家の見えない山並みばかりで、この先ほんとうに村があるのかと思いながら来た時は、この村に知り合いや友人はひとりもいませんでした。

役場の方に案内されて築150年という農家の古い大きな家を前にした時、主人も私も1年近く家族で探し続けていた所はここかもしれないと感じてい

ました。私たちがこの家に移住を決めた後、家を借りたいという問い合わせが村役場に100件以上あったと聞きました。今、身内のようによくしてくれる大家さんから畑もたくさん使わせてもらい、野菜なども作っています。近所のおばあちゃんたちからも、道具の選び方、種のまき方、苗の育て方、野菜の保存や山菜の料理など、この土地でのたくさんの知恵を聞きました。

移り変わる自然の四季の中で、季節に逆らわずにたくましく生きている花や草、虫や動物たち。光や雨、風や土、すべてのものそれぞれに大切な役目があることを見るとき、敬虔な気持ちになります。そして私たちもこの地上でどれほど深く、日々天父に愛されているかに気づかされます。

「もし人が、自分は何か知っていると思うなら、その人は、知らなければならないほどの事すら、まだ知ってい

ない。」(Iコリント8:2)

計り知れないみ業の中で私に見えているものはほんの一部ですが、この地で見るものや聞くことは私にとって驚くことばかりです。今ここで見つけたその驚きや喜びを少しでも書き留めておきたい、そんな思いで創ってきた詩が、第3回長野文学賞の詩の部門賞をいただきました。「海への思い」という山に咲くいかり草のことを書いたものです。

これからも豊かな自然の中にあふれている恵みを、家族と一緒に見つけながら多くの人と分かち合えたらと思っています。(3年の間にこの家に宿泊された方が、もう少しで100人になります)どんな所に住んでいても私たち



春になり、田には山からの雪解け水がもうすぐ入ります。ツクシ、アサツキ、ヨモギ、アザミなどおいしい野草もたくさん伸びてきます。

一人一人に行なうべきことがあり、変わらない主の見守りがあることを感謝しています。

「目を閉じて」

両手で受けとめた
わずかな冬のひざしを
手のひらではずませる

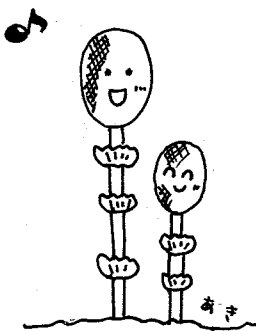
大切なそのぬくもりの重さは
目を閉じるとよくわかる

見えないものを
信じようとするとき
人は目を閉じて
しずかに祈るものでしょう

「つくしの役目」

小さな
小さな矢印を
いっせいに 空へむけて
何を伝えようと
しているの

(えっちゅう・よしえ 支部初等協
会教師)



夫婦伝道は2度目の新婚旅行

今号より、日本各地で夫婦宣教師として活躍されているかたがたの様子を数回にわたりシリーズでお伝えします。

第1回目は、1993年9月から、日本神戸伝道部で夫婦宣教師として働いているデニス・アトキン長老、セオドーシア姉妹のユニークな伝道。

◆北アリゾナ大学でアジア学を講義

デニス・アトキン長老とセオドーシア姉妹は、兵庫県豊岡市に住み夫婦宣教師として働けることをとても喜んでいました。長年の夢がかなったからです。これまでの人生で経験したさまざまな出来事によって、ふたりはこの時のために備えられてきました。「この機会を賢明に用いることができるよう、またこの地で主のみ業の役に立てるように心から願っています」とアトキン長老夫妻は語ります。

アトキン長老はユタ州ハリケーンの農家に生まれ、同州のセントジョージで育ちました。彼は自分が唯一知っている農業や酪農を生涯の仕事としてやっていこうと思っていました。しかしこの思いは、彼が日本に伝道に召され、日本の国とそこに住む人々に出会った時、大きく変わりました。

伝道が終わりアメリカに戻った時、彼は人々が日本や日本人について誤った認識を持っていることを知り、日本や日本人、また日本文化についての真実をアメリカの人々に伝えようと決心しました。そして、そのためにはもっと日本について学ぶ必要があると感じました。こうして彼は、ブリガム・ヤング大学、ワシントン大学、ハワイ大学で学び、アジア研究の分野で博士号を取得しました。

その後、北アリゾナ大学で26年間にわたりアジア学を教えました。このようにして彼は、アメリカ人にもっと日本や日本人、日本文化について知ってもらおうという目標を実現することができたのです。

1950年に日本に召されて以来、アトキン長老の心には、日本と日本の教会のために尽くしたいという思いが芽生

えました。その気持ちは永遠に変わらないだろう、と彼は感じています。伝道中、アトキン長老は、札幌市、仙台市、横浜市、広島市、そして石川県の小松市で働きました。この5つの都市は現在それぞれ異なる伝道部の管轄になっています。

アトキン姉妹はアイダホ州の南東部で生まれ育ちました。1953年にアトキン長老と結婚して以来、彼女もまた、日本人を愛するようになり、いつの日か日本へ伝道に行きたいと思うようになりました。「私たちがさまざまな国の人々と親しく交際してきたことは、子供たちにとって大きな祝福となりました。国籍や肌の色などの違いにかかわらず人々を同じ目で見られるように成長してくれたのです。子供たちはいい意味で「色盲」になってくれました」とアトキン姉妹は語ります。

アトキン夫妻と6人の子供たち（ほかにひとり亡くしている）はそれぞれが専任宣教師やステーク部宣教師として、日本やアメリカ、アルゼンチン、^{カン}香港、タイ、グアテマラなどで福音を宣べ伝えてきました。毎日の忙しい仕事の中で、人々と接しながら会員伝道をするときにも、すばらしい成功を収めることができました。

◆アメリカ人で「宝塚歌劇」の第一人者としてテレビ出演

1993年8月24日、アトキン長老は、特に興味を持っている事柄のひとつである「宝塚歌劇」のアメリカ人の第一人者としてテレビ番組の「なるほど・ザ・ワールド」に出演しました。長老は、歌劇団の人々が持つ才能や技術もさることながら、彼らのモットーである「清く、正しく、美しく」を高く評

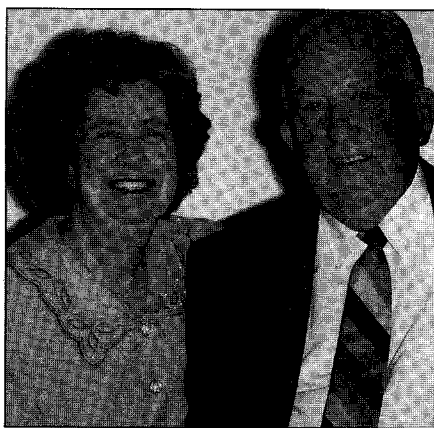
備しています。宝塚歌劇やそのほかの事柄についての研究や著作のためにこれまで何度も日本を訪れました。

アトキン夫妻は、定年後数年してから日本に来るつもりでいました。しかし、アトキン長老が定年を迎えた時、すぐにでも来日するように勧められました。ふたりは伝道の召しを受け入れ、1993年9月に日本神戸伝道部にやって来ました。かつて日本で伝道した宣教師の中には奥さんとともに再び来日し、専任宣教師や指導者、神殿宣教師として働く人々がいます。1950年代に日本で伝道した4人の帰還宣教師が現在伴侶とともに来日して夫婦宣教師として働いています。できるかぎり近いうちに日本に来ようとしている夫婦がこのほかにも数組います。夫婦で日本に来る帰還宣教師がさらに増え、途絶えることのないように期待されています。

アトキン夫妻は夫婦宣教師として働くことは大変やりがいのある仕事であり、そのおかげで自分たちが若々しく、生き生きとしていられると感じています。赴任地で福音を伝え、会員の再活発化に貢献することに加え、アトキン長老は日本神戸伝道部の伝道部長会の一員として、アトキン姉妹は福知山地方部扶助協会の会長としての責任も果たしています。これらの責任を通してふたりは豊岡、舞鶴、西脇、相生、洲本のすばらしい指導者や会員たちとともに働く機会を得ています。これらの人々は各地で働く多くの会員と同様、ほんとうにすばらしい会員であり、ともに働くことにより喜びと靈感を与えられている、とアトキン夫妻は語ります。

◆豊岡市民憲章を英訳

アトキン夫妻の伝道方法がどんなものであるかを、彼らのふたつの経験から紹介しましょう。アトキン長老と姉妹は自分たちが働く地域の歴史や文化、またその地の人々について知ることはとても重要だと考えています。このため、ふたりは豊岡市と豊岡の人々についていろいろと尋ねることから始めました。多くの人々に質問をしましたが、中でも豊岡市役所の職員の人々はとてもよく協力してくれました。



デニス・アトキン長老ご夫妻

やがて市役所の人たちは、自分たちに関心を寄せているこの外人夫婦に興味を抱くようになりました。アトキン長老が豊岡市民憲章を英語に翻訳したことを聞いた彼らは、夫妻をインタビューしたいと市役所に招きました。このインタビューを基に、豊岡国際協会のパンフレットにふたりについての好意的な記事が載せられました。また、アトキン長老がいつも行くガソリンスタンドの店長から、豊岡ロータリークラブで講演をするように招かれたこともあります。

アトキン夫妻は豊岡でよく知られる存在となっており、いつも明るく、親しみやすい笑顔で人々に接しています。彼らは出会う人々に心から関心を寄せ、人々が大切に思うものに興味を示します。このような押し付けがましくない方法を取ることで、人々は進んでアトキン夫妻を呼び止め、話をし、質問をしてくるのです。これはとても効果的なやり方です。このほかにも、神戸のある大学をはじめいくつかの団体が、アトキン長老を話者として招き、さまざまなテーマで講演してほしいという意向を示してきています。これらもまた、日本の教会のイメージを高めることとなり、いろいろな形でよい伝道の機会となることでしょう。アトキン長老はこのような機会をさらに増やしていきたいと願っています。

◆夫婦宣教師の経験を通して

「夫婦で伝道に出ることは、すばらしい2度目の新婚旅行になりますよ」

とアトキン長老は語ります。「ふたりが主に近づき、お互いがさらに親密になれるのです。そして、日本で主のみ業を推し進めるうえで、夫婦宣教師はとても有意義な方法で主に仕えられると感じています。実にすばらしい経験です。」

現在、日本で働く夫婦宣教師が非常に求められています。伝道経験の有無や、日本人であるかないかは問題ではありません。それぞれの夫婦は自分たちの持つ特別な資質を主のみ業に捧げることができるのです。

中には家族と離れることがつらくてなかなか伝道に出る決心がつかない夫婦もいます。アトキン夫妻にもその気持ちはよくわかるそうです。「家族の成長をこの目で見ることができませんが、家族が送ってくれる手紙や写真を通して家族をいつも身近に感じることができます」とアトキン姉妹は語ります。「このように言った人がいます。『夫婦伝道に出るということは子供や孫たちを離れる (leave) のではなく、彼らを導く (lead) のだ』と。私たちは、この地の会員や教会員でない人々が福音によって成長する姿を目にすることができました。自分たちの経験から、多くの人々が日本で夫婦宣教師として働く決意をされることを心からお勧めします。若い宣教師たちが果たすべき役割と、私たちが果たすことのできる役割は同じように重要で不可欠なものだからです。

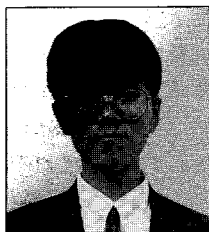
私たちがのように以前にも日本で働いたことのある夫婦宣教師は、日本人に対する変わらぬ愛と彼らに仕えたいという決意を、日本の会員たちに知ってもらうことができます。もちろん、以前日本で伝道した人々の中にはすぐには来られないけれども、もろもろの状況が整い、現在果たすべき義務の都合さえついたなら伝道に出るつमोरいの人もたくさんいるでしょう。また、日本人の夫婦宣教師も非常に必要とされています。私たちが赴任する前に豊岡で働いていらっしやうした鈴木正三長老夫妻のように、日本人の夫婦宣教師は偉大な働きをすることでしょう。」□

耳が不自由な中での伝道の召し

—— 神のみ手に使われて ——

福岡伝道部
専任宣教師

青木義人



私は、教会員の両親の元に生まれました。両親の話によると、私が生後10カ月の時にかかった、はしかが原因で耳が聞こえなくなったのではないかとのことですが、はっきりとした原因はわかりません。ただ幸いなことに、まだ少しだけ音が聞こえます。私はなぜ耳の不自由な人としてこの世に生まれてきたのかいろいろ考えさせられました。それは、私はこの体で生きようとの主のみこころだと思います。両親も、きっと主のみこころと喜んで引き受けたのだと思います。

私は、両親が教会員なので小さい時から教会に行っていました。最初はあまり活発ではありませんでした。ある安息日には、家で勉強しているから教会に行かなくてもいいだろう、と母に言ったこともあります。そんな私も、14歳の時にバプテスマを受けました。普通の人なら8歳で受けるのですが、私は耳が不自由なため、福音の理解がじゅうぶんではないのではないかと心配からでした。

バプテスマ会で、ただひとつだけ忘れられないことがあります。それは、バプテスマを終えて着替えた後、父が泣いていたことです。その時はまだ、なぜ父が泣くのか理解できませんでした。

私は、中学校まで普通の学校に通っていましたが、しかし、高等学校は設備や体制ができていないとの理由で受け入れてくれる学校がなく、やむを得ずろう学校に入ることになりました。私は両親のことを思うと、なんとしても普通学校に行きたかったのですが、入

学してみて、ろう学校でよかったと思いました。私にとって、初めて心を許せる仲間ができたからです。普通学校の時は、いつも友達がいなくて孤独でした。自分はほかの人と違うのでしかたがないと思っていたのです。でも、ろう学校では同じ境遇の仲間と、手話で何でも話せるようになったのです。この経験がなかったなら、おそらくこの伝道の召しを受けることもなかったのではないかと思います。

教会でも、セミナーを受ける年齢となりました。けれども、私は耳が不自由だったため、読解力があまりありませんでした。聖典もあまり読めませんでしたので、セミナーも不活発でした。

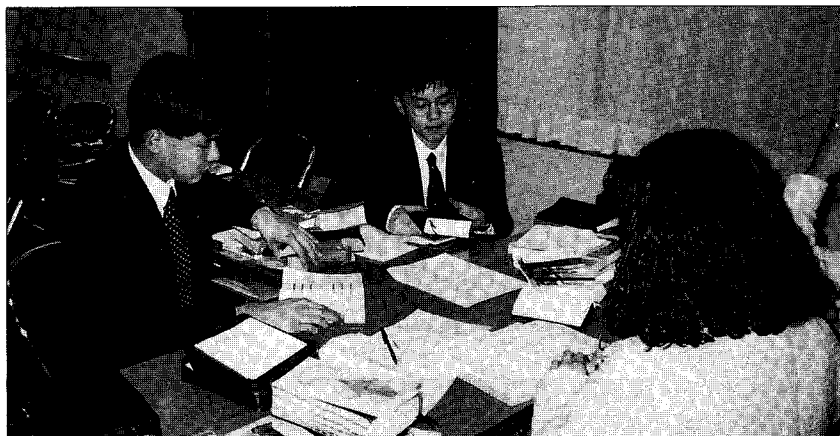
そんなある日、なにげなくセミナーのテキストをめくっていると、次の聖句が目にとまりました。アルマ書第26章17節から20節です。教会を滅ぼそうとしたアルマの息子アルマと、モーサヤの息子たちが改宗した証です。私はこの中に、自分との共通点を見つけ、悔い改めました。そして、できないながらも一生懸命勉強して、福音を学び、知らない人々に教えてあげようと思ったのです。その時から、安息日の集会や、そのほかの活動にも積極的に参加するようになりました。また書記補助の責任も受け、召しを果たせるよう頑

張りました。

伝道に出たいと思ったのもこのころからでした。私は、父に伝道に出たいと話しました。父は最初、障害者であるために、いろいろ問題が起きるから考え直すようにと言いました。言葉が不自由では、福音を人々に伝えることができないばかりか、ともに働く同僚にも迷惑をかけることになり、仮に2年間無事に伝道が終わったとしても、それから職を得て社会へ復帰することがむずかしいと言うのです。確かに、私は社会的に弱い立場にあるのでしょう。しかし、伝道に出ることの正しさや大切さは、確信を持って証することができます。

私はひとつの聖句を思い出しました。ニーフアイ第一書第3章7節の「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである」というニーフアイの言葉です。私はこのことを父に話しました。父は、私が話すことを黙って聞いていました。そして「よし、おまえがそれほどまでに真剣に考えているのなら、なんとしても伝道に出してあげよう」と言いました。私は、この時ほどうれしかったことはありません。私を助け導いてくれた主と、私の両親に心から感謝しました。

伝道に出るための準備が始まりました。伝道に使うビデオ「大いなる富」や「最初の示現」を、物語や意味がわかるように、家族に通訳してもらい、書き留めるようにしました。ユースミッ



JMTCで同僚と福音を勉強する青木長老 (写真中央)

シヨナリーにも2回参加しました。そして伝道に出られるように、毎日祈ってから寝ました。そんなある日、監督から「あるワード部で、耳の不自由な兄弟が伝道に出たいと申し出ましたが、召されなかったそうです。もしかすると、青木兄弟もむずかしいかもしれません」と言われました。私はとてもショックでした。今まで一生懸命準備してきて、もし召されなかったらどうしよう、そう思い悩む日々が続くようになりました。教会でも、やはり障害者はだめなんだろうかと、私は思っていました。

そんなある日、1通の手紙が届きました。英文で書かれた封筒は、確かにソルトレークの教会本部からでした。主からの召しだったのです。私はうれしくて、すぐに両親に知らせました。両親も心から祝福してくれました。一時とはいえ、召しが来ないのではないかと疑った自分を、その時は深く悔い改めました。それとともに、主の温かい愛に感謝し、心から祈りを捧げました。

伝道に出る2日前、ふたりの宣教師が私の家を訪問して、1通の手紙を渡してくれました。その手紙にはあるひとりの姉妹のことが書かれていました。彼女は、グリーンカンファレンスに参加した時、耳が不自由で音が聞き取れるはずがない私が、多くの兄弟の助けを得て、音楽祭の中でドラムをたたいてバンド演奏をしたことや、証会で、不自由な言葉なのに一生懸命証をした姿に感動し、バプテスマを受ける決意を固めたことが書かれていました。そして、そんな彼女をバプテスマへ導いたのが、訪問してくれたふたりの宣教師のうちひとりだったのです。「私は自分に誇りを感じずるのではない。主が私に命じたもうたことを誇りに思うのである。すなわち、私は神の御手に使われて誰かを悔い改めさせられるかと思って誇りを感じた喜ぶのである」(アルマ29:9)の聖句が確かなものであると、私はその時確信しました。

この感動を抱いて、2日後の2月4日に日本宣教師訓練センター(JMTC)に入所しました。ここではほんとうにたくさんのすばらしいことを学ばせていただきました。また多くのすば

らしい同僚に会うことができました。同僚と教師の励ましと助けによって、伝道に出ることができたのだと思っています。

今、私は福岡県筑紫野市で伝道しています。同僚もすばらしい人です。言葉が不自由なため、まだじゅうぶん働くことができないのが残念ですが、同僚が毎日助けてくれるので負けないで頑張っています。会員の温かい励ましからも、とても勇気づけられています。

ある時、求道者が私のためにわざわざ筆談してくれたことがありました。

この時はほんとうにうれしく思いました。心から熱心に神の教えを説く時は、言葉の障害も乗り越えることができるようになるようになりました。しかしこのまま最後まで順調に伝道が進むとは思っていません。おそらく、たくさん問題が私を襲ってくるでしょう。けれど、私を助けてここまで導いてくださった主や両親、同僚、多くの兄弟姉妹のためにも頑張りたいと思っています。(あおき・よしひと 高崎ステーク部高崎東ワード部出身)

障害を乗り越えて

高崎ステーク部高崎東ワード部 青木計

人が生を受けて、この地上に生まれ出るときは、それぞれに異なった運命を与えられてくるものです。ある人は富に恵まれ、ある人は貧困の中に生まれます。また健康に恵まれて生まれてくる人もあれば、障害を背負って生まれてくる人もあります。これはしかたのないことで、いくら嘆いたり、愚痴を言っても解決することはできないのです。

それよりも、人間にとって最も大切なことは、この与えられた運命の中で、どれだけ一生懸命生きるかということです。耳に障害を持って生まれた義人が、それらを乗り越えて主の福音を伝えたいと決心してくれたことを、私はほんとうにうれしく思っています。それとともに、ここまで導いてくださった主に、心より感謝いたします。(あおき・はかる)

自立していく息子を見て

高崎ステーク部高崎東ワード部 青木柚実子

息子が生まれてからのことが、いろいろ浮かんできます。教えなければならぬ言葉がたくさんあり、どれから教えてよいか迷い、時には言葉が通じなくてイライラしたり、気を取り直したりといった日々の連続でした。息子の将来のことを考えると霧がかかっているようでした。しかし、そんな日々を振り返ってみますと、子供に教えることよりも、子供を通して学ぶことの方が多かったように思います。

2年前、伝道に出たいと言い出し、就職もやっとできたのにせつかくの仕事辞めるのか、という私の思いは息子によって主への思いへと変わってきました。本人の意志は堅く、息子も

宣教師の模範を見て自分から積極的になり、変わっていきました。

主のなされることには人の計り知れないものがあります。自立していく息子を見て、後は主にゆだねるしかないと思いました。自分のことで精いっぱいだった子が、ほかの人のことを思いやることができるようになったのは、なんてすばらしいことかと思えます。喜びも苦しみもすべて彼の経験になります。確かに主は私たち一人一人をご存じであり、求めるならば手を差し伸べてくださることを証します。(あおき・ゆみこ ステーク部初等協会第一副会長)

家族の証

家族の改宗を振り返って

大阪北ステーク部豊中第2ワード部

中西和彦

2年ほど前から、私には老人性痴呆症の母と脳梗塞で倒れた父がおり、父の看病と母の介護に明け暮れる姉たちを助けるため、家内は仕事を休み、私は会社の帰りに実家に立ち寄り、泊まり込みで両親の世話をするという、忙しい日々を送っていました。またそのころの我が家は、娘の高校受験と息子の大学受験も控えていました。そんな中にあっても子供たちの協力もあり、お互いに支え合って頑張っていました。

疲れもピークに達していた昨年2月ごろ、宣教師たちのヘアカットをよくしている美容院の先生の紹介で、家内と子供たちは教会の英会話教室に通うようになりました。特に家内は週1回の気分転換ができると毎週木曜日を楽しみにしていました。英会話に何度か通ううちに、子供たちがビデオによる教会のレッスンを誘われ、2回ほどお話を聞きました。そのころは教会について何も知らなかったため、「そのまま宗教に引きずり込まれるのではないか」と話していたそうです。ちょうどそのころ、家内も同じように誘われましたが、「夫の養子に入った家は宗教が神道なので」と断わり、それを理由に子供たちにもそれとなくうまく断わるようにと話していたようです。

それから1カ月後に宣教師たちとの個人面談があり、再度同様の誘いを受けました。今度は無下に断わることもできず、また3人が無料で英会話を習っているということもあり、家内はその美容院の先生とふたりで宣教師たちのお話を聞くことにしました。その時ふたりは「どんなことがあっても教会にだけは入らないようにしましょうね」と約束をして話を聞き始めたそうです。

回を重ねていくうちに先生の都合が悪くなり、家内ひとりが続けて行くよ

うになっていました。家内は姉妹宣教師の熱心なお話と福音についてのいろいろな証を聞くうちに、モルモン経を真剣に読むようになり、片時も離さず、時には入院中の母のまくら元で一晩じゅう読みふけていました。そして約2カ月後の8月の終わりには、モルモン経を全部読み終えていました。その間、我が家でも福音を勉強する日があり、ときどき娘が同席するようになっていました。しかし私はまったく無関心でいつも隣の部屋でビールを飲み、テレビを見ながら食事をしていました。

家内はある日、宣教師から「バプテスマをお受けになりませんか」「一度教会に来られませんか」と誘われ、初めて聖餐会に参加しました。帰ってきた家内は、ふだんの看病疲れの顔からは想像もつかないような、はつらつとした面持ちでした。それ以後バプテスマのことを口にするようになり、私に相談してきました。私は「思想、信仰は自由だから賛成も反対もできない。しかし心の中では反対である」とその時は返事をしました。しかし家内は受けることに決めていたようです。

バプテスマの日が9月12日に決まり、私はその日に教会に行くかどうかを1週間ほど考えましたが、その日の朝に娘たちの熱心な誘いによって行く決心をしました。バプテスマの神聖な儀式を見たり、賛美歌を聞いたり、たくさんの人たちから祝福されている姿を見たりしているうちに何か心を打たれ、胸に込み上げてくるものを感じました。

その日以来、私もモルモン経がどんな本なのか知りたくなり、以前宣教師からいただき本棚に飾ってあったモルモン経を通勤電車の中で少しずつ読み始めました。そして娘と一緒に姉妹宣教師から福音を学ぶことにしました。娘と違いなかなか覚えが悪く、質問に

なかなか答えられず宣教師たちを手こずらせました。

福音を学んでいくにつれて知恵の言葉などの戒めを守るように求められました。娘も「修学旅行の時に花茶やコーヒーしかなかったらどうしよう」と少し悩んでいたようですが、祈りによって助けがあり、花茶や水、ジュースを選ぶことができたそうです。娘は祈りの大切さを知り、また神様はいつもそばにいて助けてくださることを体験したと言っていました。私は、たばこについては子供が小児ぜんそくにかかったその時からやめました。お酒はほとんど毎日、コーヒーも毎日数杯飲んでいました。しかし長男の受験を機会に親が毎日お酒を飲んでいてはいけないと思い、少しずつ減らそうと家族と約束をし、11月21日の懇親会を最後に完全にお酒をやめることができました。またコーヒーについても代わりにいろいろなスープを飲むようにしました。

そして、娘が11月23日にバプテスマを受けることが決まりました。娘は家内の影響が大きく、聖餐会にも参加していたためバプテスマも何の抵抗もなく受け入れたようです。バプテスマ会には英会話で教えていただいた、たくさんの宣教師たちも祝福に来てくださり、大変にぎやかな中にも厳粛な儀式が執り行なわれ、私はその時娘を神様に取られたようで少し寂しい気持ちになりました。教会員になった娘は「若い女性」の活動や、賛美歌の演奏の練習、そして本業の学校の勉強にと毎日充実した日々を送っています。

師走に入りほんとうにたくさんの宴会がありましたが、約束を守るため、また皆に知ってもらうために、私は会社の机に「減」アルコール・カフェイン、「脱」アルコール・カフェイン、「禁」アルコール・カフェインと記して、取り組み始めた月日をワープロで入れて張りました。そのようにして、たくさんあった宴会でお酒を断わることができました。しかしその時はまだ心の中では、子供の受験が終わればもう一度飲もうと思っていました。

12月のある日突然、宣教師たちから「25日にバプテスマを受けられませんか」「一度教会の聖餐会に来てみませんか」と言われましたが、私にはまだ受ける気はありませんでしたので、即答は避けていました。私が初めて自分から教会の聖餐会に参加したのは12月12日でした。その晩、夜中に体じゅうが熱く汗びっしょりになり、まくら元に白い衣を着た人がスーと立っておられる夢を見ました。その時ハッと目が覚め家内に話すと、「すごい汗だね」とびっくりしていました。私はきっとこれは「イエス様」が私を呼んでおられるのだと感じました。今までは、バプテスマを受けて永遠の家族になり幸せを得たいという思いと、私は絶対受けられないという思いとの間で私の心は揺れ動いていましたが、その日をきっかけに受けたい、受けなければならぬと思うようになり、12月25日に受ける決心をしました。そのことをレッスンの最後の日に宣教師に伝えると、胸にぐっと込み上げてくるものがあり、ティッシュペーパーの箱が皆の手から手へとぐるっと回っていました。

息子も3日ほど前に私と同じようにバプテスマを勧められました。その日息子は神様のことや聖霊について学び、「バプテスマを受けませんか」と尋ねられましたが、今は受験勉強がいちばん大切な時期で1分1秒も惜しい、バプテスマを受ける時間も惜しいという気持ちと、神様からの祝福を受けたいという気持ちがあり、「一晩考えさせてほしい」と言ってその日は宣教師たちと別れました。その夜、息子は自分にとっていちばんいいのはどちらなのかを祈り求め、翌日の朝宣教師たちにバプテスマを受ける決心を伝えました。

たくさんの宣教師や教会員の皆様から多くの経験や証を聞かせていただき、そして私たち親子が12月25日の聖なる日にバプテスマを受け、家族全員が教会員になれたことに感謝しております。私たち家族は神様の導きと宣教師や教会員の皆様の導きによって、まっすぐに狭い道への扉を開けていただき、やっと足を一步踏み出し始めたばかりです。ニーファイ第二書第31章19節から21節にあるように「さて私の愛する兄弟た

ちよ、私は尋ねたい、あなたたちはこの真直ぐで狭い道に入ったら、それで万事終りであるか……」との言葉をいつまでも忘れず、互いに力を合わせ助

け合い、ひとつの目標に向かって進んで行くならば、家族のきずながより一層強められると信じています。(なかにし・かずひこ ワード部書記補助)



中西ご家族 (左から、正樹兄弟、純子姉妹、真澄姉妹、和彦兄弟)

☆永遠の家族として

この教会を知るまでは、私はふたりの子供とやさしい主人に囲まれ、ささやかですが幸せな当時の生活に満足していました。それが宣教師を通して永遠の家族について学ぶようになった時、子供たち、私たち夫婦、先祖の人々が神殿での結び固めの儀式により、やがて永遠の家族として将来も一緒に住むことができるという、もっと深いところでの幸せを知りました。神様からの最大の賜です。

今、毎週家族4人がそろって教会に集う時、言葉では表わせないほどの喜びを感じます。神様は、私たち一人一人を愛しておられます。そして福音に従う生活をするにより、さらに幸せになれると約束してくださっています。これからは家族がお互いに支え合って信仰生活を送っていききたいと思えます。(中西真澄 ワード部扶助協会書記補助)

☆宣教師たちに励まされ

父と一緒にバプテスマを受け、早くも1カ月が過ぎました。今は家族そろって毎週教会に集っています。私は大学受験の前で忙しい日々を過ごしています。ときどき勉強中に落ち込

んだりすることがあるのですが、そんな時に宣教師たちのことを思い出すと、とても勇気づけられます。教会でも、多くのかたがたが私をよく励ましてくださり、勉強の励みになります。

今は、聖餐会、日曜学校、神権会にしか出席できませんが、受験が終わり次第、教会のいろいろな活動にも参加していきたいと思っています。(中西正樹 ワード部若い男性会長)

☆教会が楽しい

私はこの教会に通うことができ感謝しています。私は今オルガニスト補助の召しを受け、また若い女性の活動にも参加し、楽しく教会に集っています。この間に多くの宣教師や教会員の皆さんに助けられて、自分自身少しずつですが成長しているのがわかります。

今は学校に行くよりも毎週教会に集う方が楽しいと感じています。学校では教えてもらえないようなプログラムがあり、それらの活動を通してたくさんの友達ができたと感謝しています。4月からは早朝セミナーに参加します。学校との両立はむずかしいと思いますが、頑張ろうと決心しています。(中西純子 若い女性ローレル会長)

先祖に導かれた系図探求

東京南ステキ部東京第2ワード部 ニブリー能栄

当時、アメリカのカリフォルニア州にある大学に留学中だった私は、学生ばかりのワード部に集っていました。そのワード部に家族歴史（系図）のクラスが新しく設けられ、先生からクラスに出席するように言われました。私は、日本から資料を取り寄せるのは大変だし、日本で家族歴史のクラスに出席したことがあるので、その必要はないと言いました。すると先生が、「私は、このクラスにだれを出席させるべきかお祈りをして決めました。特にあなたは出席すべきだと強く感じましたので、このクラスに来なければなりません」と言いました。それで毎週出席していましたが、系図の探求は何もしていませんでした。

それから何カ月か過ぎたある晩に、夢を見ました。その夢の中で、ふたりの若い女性が現われて、そのうちのひとりの女性がこう言いました。「私たちは、あなたのお父さんの姉です。あなたはアメリカに来て、自分の好きなことばかりして、私たちに死者のためのバプテスマをしてくれていないではありませんか。そんなことでは日本に返しますよ。」夢の内容は、それだけだったのですが、朝起きてその夢がとも心に残っていました。

それでもまだ私は、系図のために何をしようともせず、ただその夢のことを考えていました。日がたつにつれ、その夢がますます心に重くのしかかってきました。そのことを教会の指導者に話すと、それは霊界からのメッセージだからすぐ系図の探求をするように言われました。

早速、日本の姉に手紙を書き、父の戸籍謄本を送ってもらいました。父は、姉8人、兄3人の12人兄弟の末っ子で、私が物心ついてから生存していたのは、父の8人の姉のうちふたりしかいませんでした。ですから夢に出てきたふたりの姉も、亡くなっている6人のどの姉なのか、私にはわかりませんでした。

系図の記録用紙に上から順に名前を書き入れていきました。7番目の姉の名前を書き入れた途端、私は、声を上げて泣きだしました。それは今までに感じたことのない深い感激の喜びの涙でした。しばらく私は、涙を抑えることができませんでした。そして8番目の姉の名前を書き出した時にも同じことが起こりました。私は、夢に出てきて死者のためのバプテスマの儀式を頼んだのはこのふたりの姉に違いないと確信しました。そして声を出して、「こんなに死者のためのバプテスマをしてほしかったのに、遅くなってごめんさい」と謝りました。

夏休みに日本へ帰った時、父が私の夢の話聞いてすぐ、そのふたりの姉がだれなのかかわかると言いました。驚いたことに、それは私が記録用紙に名前を書いて泣きだしたあのふたりの姉の名前でした。もし生きていたとしたら教会に入りたがる人たちは、このふたりしかいないからだと言いました。

ふたりとも同じ昭和5年に22、23歳という若さで未婚で亡くなったということです。しかも看護婦であったその

うちのひとりの姉は、伝染病がはやった時、うつるからとだれも看病に行きたがらないのをかわいそうに思い、看護に行つて病気がうつって亡くなったということもその時、父が話してくれました。

そして、夢で見たふたりの姉がどんな顔かたちをしていたかと父が尋ねたので、私に話しかけた人は父にそっくりで、もうひとりはとてもきれいで、父に似た人の後ろに一步下がって何も言わず、とてもおとなしく見えたと言えました。すると父はますます確信を深め、絶対にこのふたりだと言いました。話しかけたのが7番目の姉で、黙っていたのが8番目の姉だとも言いました。7番目の姉は、父にそっくりで、不正を見ると黙っていられず、はっきりといさめる人で、8番目の姉は、当時の小野小町と言われるほどの美人でおとなしく、言いたいことはいつも7番目の姉の後ろに立って、姉に言ってもらっていたということです。

父も私も、私の見た夢がただの夢ではなかったことを、その時悟りました。そして当時まだ教会員でなかった父が、「このふたり以外にも、死者のためのバプテスマを望んでいる人がいるだろうから、先祖全員の死者のためのバプテスマの儀式をするように」と言いました。その話を聞いた父の兄嫁が「私は、もう年を取っていて教会には行けないので、私が死んだらその死者のためのバプテスマをしてください」と私に頼みました。その伯母も14年前に亡くなり、約束どおり、彼女に死者のための身代わりの儀式を施しました。それからときどき、彼女が何も言わず、にこにこ笑っている夢を見ました。きっと約束を果たしたことを、喜んでくれているのだと思います。

また、当時ワード部の指導者から結婚をしたかったら系図探求をするようにとも言われました。すべてをアメリカの系図協会へ送って間もなく、私は



ニブリー能栄ご家族

役員の異動

プロボ神殿で結婚することができました。そのころ、東京神殿がまだ建っていなかったのに、提出した先祖のために、みずから身代わりのバプテスマの儀式が受けられるなどとは考えもしないことでした。しかしたまたま新婚生活をアメリカで始めたので、結婚して1年もたないうちに、プロボ神殿でみずから先祖のために、死者のためのバプテスマの儀式を受けることができました。系図を提出した時点でまだ独身だった私には、それらすべての先祖の男性のために、自分の夫が死者のためのバプテスマの儀式を受けてくれるようになることは、想像もつかないことでした。

現在、私たちは14歳の娘をもつ3人家族です。夫はステーキ部高等評議員として頑張り、福音にそった幸せな毎日を送っています。たくさんの貴重な経験を通して、死者のためのバプテスマの儀式が真実のものであり、系図を採らし儀式を施すことにより、私たちも多くの祝福が得られることを証します。(にぶりー・よしえ ワード部オルガニスト)

1994年4月27日から5月31日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

●札幌伝道部釧路地方部帯広支部

新支部長：森本公三

(前任者：酒井秀一)

●仙台ステーキ部山形ワード部

新監督：武田章

(前任者：山田正)

●東京南ステーキ部東京第2ワード部
(英語)

新監督：Jordan Powell

(前任者：Ronald Grimshaw Felt)

●名古屋ステーキ部名東北ワード部

新監督：白岩和男

(前任者：剣秋雄)

●名古屋伝道部石川地方部小松支部

新支部長：高嶋英明

(前任者：竹内章浩)

●大阪伝道部田辺支部

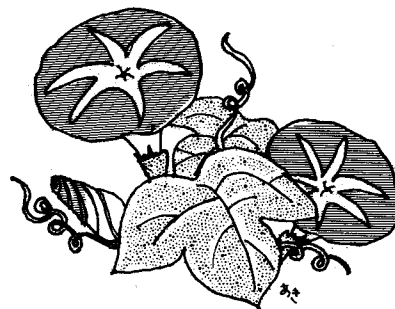
新支部長：本田裕二

(前任者：Kevin Lee Hammersley)

●神戸伝道部福知山地方部舞鶴支部

新支部長：細谷秀之

(前任者：佐藤祐二)



1994年度 「クモラの丘霊園」 分譲のお知らせ

「クモラの丘霊園」分譲の今年度募集の締め切りは、1994年12月31日です。永代使用料は毎年値上がりいたします。分譲希望者は、早目にお申し込みください。

所在地：埼玉県入間郡毛呂山町長瀬
1313 武蔵野霊園内
(池袋駅から東武東上・越生線でおごせ
線で約1時間、武州長瀬駅下車、徒歩7分)

1. 墓地永代使用料 1区画 305,000円
支払い方法 一括または分割払い。分割払いの場合は、初回金4,100円、以降毎月5,100円59回払いの無利子分割払いとなります。
2. 墓地管理料 年間 3,000円(初回金とともに1年分を前納し、以降毎年定められた期日までに支払うものとします)
3. 申し込み方法 以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。
(1) クモラの丘霊園使用申し込み書
(2) 住民票
(3) クモラの丘霊園永代使用契約書 2通
(4) 銀行自動振替手続き書類
4. 今年度申し込み期限 1994年12月31日
5. 墓所の指定 申し込み書類受領確認の後、順番に行ないます。
6. 初回金および管理料の振込先 三和銀行青山支店 普通預金口座 219499
クモラの丘霊園 代表 岡本 亮
7. お問い合わせ先 〒106 東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会内
クモラの丘霊園事務局 電話03(3440)2351(代)
8. その他の情報 分譲開始年月日：1982年9月19日
分譲数：1,600墓所中、558墓所が分譲済み。(1994年6月9日現在)
他霊園との比較：永代使用料は他霊園の5分の1から8分の1。

6月に召された専任宣教師

第178期生 12人



後列左から1-5, 前列左から6-12

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 坂野佳彦	大阪堺S/泉北B	札幌伝道部
2. 直江敦	東京南S/渋谷W	札幌伝道部
3. 永田茂雄	岡山S/鳥取B	東京南伝道部
4. 山田修二	札幌西S/室蘭W	沖縄伝道部
5. 松村邦明	東京東S/小岩W	神戸伝道部
6. 白川由美	岡山M/松山D/今治B	仙台伝道部
7. 住吉朋美	広島S/廿日市W	名古屋伝道部
8. 岩田孝子	東京北M/長野D/松本B	大阪伝道部
9. 古川操	大阪堺S/和歌山W	東京南伝道部
10. 加藤真理子	福岡M/鹿児島D/鹿児島B	東京南伝道部
11. 井上さやか	東京東S/鎌ヶ谷W	福岡伝道部
12. 岡本由起	東京東S/鎌ヶ谷W	神戸伝道部

M:伝道部, S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

新刊の紹介

●東京神殿の写真(昼間)

A 4変 (280×215mm)

カタログ番号 36228 300

価格 50円

*既刊の東京神殿の写真(夜間)〔カタログ番号・86233 300〕と混同しないようにご注意ください。



編集室から

皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。

▶現在ローカルページでは証の著者の^{あかし}生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を明記し、写真を同封のうえお送りください。

▶あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話 03(3440)2666
FAX 03(3440)3275

神殿参入のチャレンジと祝福

ソロモン神殿が完成した時、イスラエルの民は献堂を祝うためにほとんどひとり残らずこぞってやって来ました。(歴代下5-7章参照) 今日も神殿の献堂は教会にとって大きな喜びの時です。

なぜ神殿の献堂はそれほど喜ばしい機会なのでしょう。ボイド・K・パッカー長老はこのように説明しています。「すべての道は神殿に通じています。なぜなら、主のみ前に行く資格を得る備えをするのは神殿においてだからです。」(『わたしを覚えよ』「扶助協会個人学習ガイド1」p.87)

神殿参入に伴うチャレンジを乗り越える

神殿の建設が教会の多大な努力と犠牲を要するように、神殿参入も私たちに個人的なチャレンジを乗り越える努力と犠牲を求めます。

イレイン・L・ジャック会長は、フィリピンでニップ小屋(ニップヤシの葉でふいた小屋)に住む、8人の子供の母親を訪問した時のことを、こう語っています。「部屋の隅[の]……小さなテーブルの上にポータブルミシンが置かれてありました。……[この姉妹]は2年間、その旧式のミシンを使って、ほかの人のために仕立て物をして収入を得ました。そのお金で、家族を神殿に連れて行って結び固めの儀式を受けたのです。」(『あなたの足の道に気をつけなさい』「聖徒の道」1994年1月号, p.113)

神殿の近くに住んでいる人でさえ、個人的なチャレンジを乗り越えなくてはなりません。ある人にとっては、健

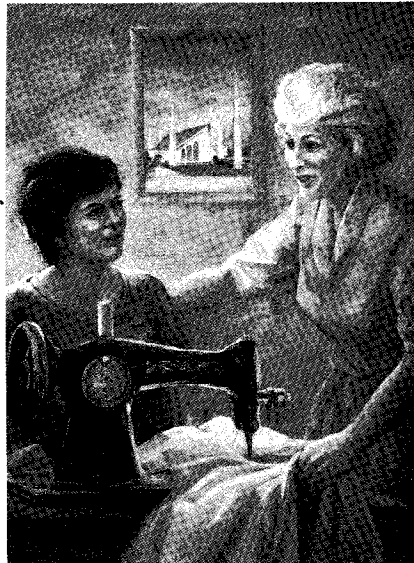


ILLUSTRATION BY JUDITH MEHR

康が優れないことが問題であり、またある人にとっては、スケジュールがぎっしり詰まっていることが問題かもしれません。家族の中に絶えず世話をする必要のある病人や幼い子供がいて、家に残して出かけるのが困難な場合もあるでしょう。また、教会員ではない夫が神殿参入を思いとどまらせている場合もあります。ときには、信仰が弱まったり、ふさわしくないという思いがよぎることが問題となったりもします。

私たちの置かれた状況がどうであれ、神殿へ行くにふさわしく生活するよう、日々努力をすることはできます。その機会がすぐにやって来なくても、そのようにしていれば、私たちはより幸福な生活を送れるでしょう。

●神殿に参入するために日々ふさわしく生活するには、どうしたらよいでしょうか。

神殿参入の祝福にあずかる

ふさわしい教会員は、死者のためのバプテスマ、エンダウメント、永遠の結婚、結び固めなどの神聖な神殿の儀式をみずから受けるとともに、ほかの人が受けるのを助けることもできます。こうした奉仕をするとき、私たちは個人的な祝福を受けます。エズラ・タフト・ベンソン大管長はこのように記しています。「みたまの力によって、純粋な知識が注がれることもあります。神殿は、個人の啓示を受ける場所です。私は、問題や困難にぶつかって押しつぶされそうなときに、答えを求め、祈りの気持ちで主の宮居に行きます。」(『神殿——神聖な所』「聖徒の道」1992年6月号, こどものページp.2)

神殿に参入すると、多くの面で祝福を受けます。たとえば、定期的に神殿に参入することができたある姉妹は、自分の生活が以前よりも整い、問題をよりよく解決できるようになったことに気づきました。しかし、何よりうれしかったのは、10代の息子がこう言った時でした。「お母さんとお父さんが神殿に行くと、ぼくの一週間まで調子よくなるよ。」

神殿参入することによって、私たちは永遠の事柄に心を向けられるようになります。また、愛し、奉仕し、聖典を理解し、天父のみもとで再び住もうという目標を目指して進歩する、といった能力を神殿での経験によりさらに伸ばせることがよくあります。

●神殿に参入すると、その結果として、あなたの生活はどのように変わのでしょうか。□



静かな細い声を 聞けるように 子供たちを助ける

Ｃ・テリー・ワーナー、スーザン・Ｌ・ワーナー

子供たちは霊的な感情をどのように表現するのでしょうか。

「とってもすばらしい気持ち。心配なことなんか、なくなっちゃう感じ。」(ダニー、12歳)

「全部だいじょうぶって感じかな。」(サラ、7歳)

「悪いことは何もしたくないの。それで、いつもいい子になりたい。それだけ。」(ブレイン、6歳)

「ただの気持ちっていうんじゃないくて、天のお父様とイエス様の愛にもっと似てる。神様と家族に感じる愛ってあるでしょう。」(ミッチェル、10歳)

「バプテスマの時みたいに、悪いところを全部洗い流してもらったような気持ち。」(ジュリア、9歳)

子供たちも霊的な感情を覚えることがよくあります。そして、多くの場合、そのような感情は喜びの表情となって、彼らの顔に出てきます。しかし、上記のような例とは違って、それらの感情が霊的なものであり、神から与えられることを認めるように教えられていない子供たちもいます。愛ある両親から福音を教えられた子供でも、霊的な事柄についてのこれらの説明を理解したり、自分自身のこととしてとらえたりしては限りません。

キャンプファイアーを囲んだ証会あかしかいの後で、15歳のボニーが友達のタニアに、みたまを感じるというのは、どういふことなのかを聞きました。タニアの返事はこうでした。「口で伝えるのはむずかしいんだけど、胸の中に思いがあふれてくるって感じ。とても幸せで、涙が突然

込み上げてくるような感じよ。」

するとボニーが驚いてこう返事しました。「そういう気持ちなら、私にも経験がある。でも、それがみたまだとは知らなかったわ。」

一般的に、霊的な感情を認識できるように子供を助けるという点で、親に勝る働きができる人はだれもいません。また、それを行なうのに、子供時代ほどよい時期はありません。主は親に、子供たちへの深い愛を授けておいてになります。また子供たちの必要と思いを識別する特別な能力、子供たちのために霊的な導きを受ける権利も授けてくださっています。小さな子供たちは親の愛に対しては非常に感じやすく、敏感に反応します。ですから、子供たちは親からの影響を受けやすく、親に教えてもらいたいと強く望んでいます。

外国語の教師の多くは、子供が外国語を覚える最もよい方法は、その言語にどっぷりと浸る「集中訓練方式」だと言います。この方式では、その外国語を話す人に囲まれた状況の中で、実際に自分で話してみるように求められます。そして、単に言葉を口にするというだけでなく、よどみなく話し、その外国語自体で思考することを覚えていきます。霊的教育の「集中訓練」の場としては、家庭が最適です。家庭では、霊的原則を日常生活の基本とすることができるからです。「努めて〔主のみ言葉〕をあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語

注意深く選んだ活動はこの世的な影響力を除きさり、家族を平安と愛に満ちた助け合いの輪の中に導く助けとなる。霊的な感情のひとつである永遠の家族への帰属感は、神聖な標準を子供たちに与えてくれる。

らなければならない。」(申命6:7)

子供の霊的訓練を集中的に行なうには、まず親が自分自身の訓練から始めるのが賢明です。自分自身の霊的感情をなかなか認識できないために、みたまについて教えるのがむずかしいと感じている人もいるでしょう。私たちは誤って何か特別な示しを求めてしまうことがあります。霊的体験はどちらかというと、穏やかな確信、熱い思い(教義と聖約9:8参照)、あるいは何らかの行動を促したり抑制したりする静かな思いという形で来ることが多いものです。

エズラ・タフト・ベンソン大管長はこう述べています。「私たちは、ある種の感情という形で主のみ言葉を聞くことがよくあります。私たち自身が謙虚で敏感であるならば、主は頻繁に私たちの感情を通してささやきかけてくださることでしょう。私たちが霊的な促しを受けたときに、大きな喜びを感じたり、涙を流したりするのはそのためです。」(「エズラ・タフト・ベンソンの教え」p.77) そのような感情としては、困っている人への思いやり、親や指導者への心からの従順、人を赦す心、自分が誤解していた人との関係を修復したいという強い望み、感謝の思いなどがあるでしょう。これらの霊的な感情は、私たちが主から授けられた良心に誠実になればなるほど、よりはっきりとまた強くなっていきます。(モロナイ7:15-17参照) ベンソン大管長は教会の子供たちに向けて次のように話したことがあります。「みなさんが良いことを行い、良い気持ちを感じるのは、聖霊がみなさんに語りかけるからです。」(『教会の子どもたちへ』「聖徒の道」1989年7月号,p.86)

心の中でみたまを求め、従おうと努力すると、みたまによって教え、人の心の琴線きんせんに触れることがさらによく

できるようになります。(II ニーファイ33:1参照) 反対にみたまから遠ざかっていると、いくら正しいことを話しても、子供たちに真意が伝わらないかもしれません。子供たちは、親が自分たちに従順を強制していると感じ、抵抗するかもしれません。ひとつの例を見てみましょう。ある6歳の女の子がスーパーマーケットでだだをこね、キャンデーが欲しいと騒ぎだし、陳列棚の缶ジュースにまで手を出しました。かっとした母親はやさしく諭すどころか、子供の肩を押さえて、そこに座るように険しい口調で言いました。すると娘が言いました。「外でだったら座るけど、お店の中では立ってるもん。」

「『みたま』は、信仰の祈りによりて……与えら」れます。(教義と聖約42:14) このみたまによって子供たちを教えるなら、彼らが自分自身の霊的な感情を認識し、求め、それによって導きを得られるよう、次のようにいろいろな面で親は力になることができます。

1. 祈りができるように助けを与える。この助けを、子供たちがほんとうに小さいうちから始める必要があります。朝に夕に子供たちとともにひざまずき祈りましょう。祈りを通して、私たちは家族どうしの愛、また天父への愛を言い表わすことができます。この神聖な体験を繰り返し積み重ねることによって、子供たちは祈りと密接な関係にある敬虔けいけん、愛、安らぎ、平安などに頻繁に立ち返る習慣を身につけることができます。

個人の祈りが霊的な安らぎの場となるのはもちろんですが、家族の祈りも霊的な感情を味わう大切な機会を提供してくれます。たとえ小さな子供であっても、家族の祈りの中にある敬虔さと霊的な安らぎを感じることはできます。もちろん子供たちが騒いで、親がいらいらしたりすることもときにはあります。しかし、ともに祈ると

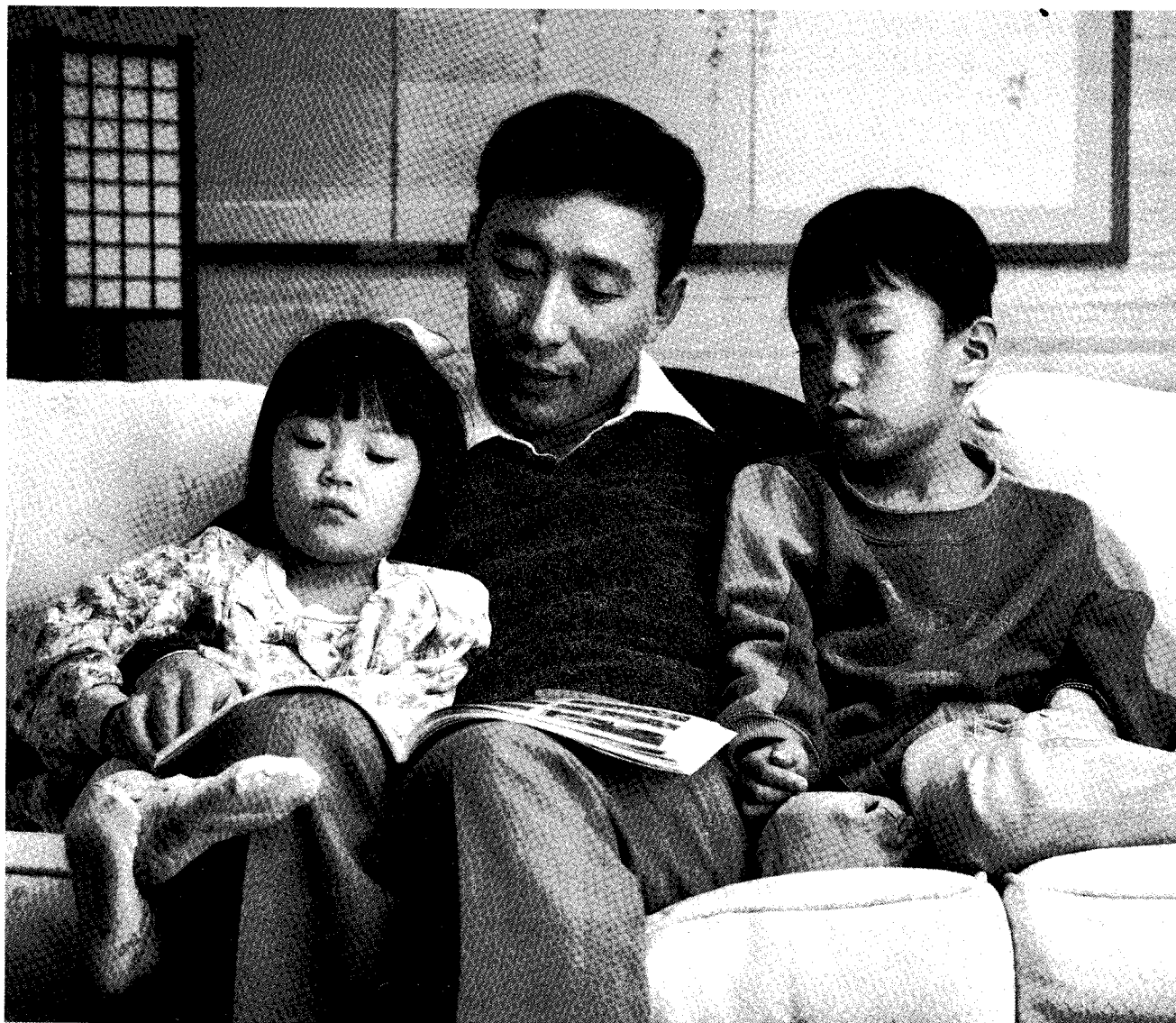


いう反復体験には、その輪に加わる家族全員の心を和らげ、強める力があります。我が家の年上の子供のひとりがある時妹にこう言ったことがありました。「ジェニーが天のお父様に話してるのを聞いていると、天国ってどんな所か少しわかるような気がするわ。」息子のひとり、やんちゃ盛りの3歳のころでも、家族の祈りの中で自分の名前が挙げられると静かになることがよくありました。

2. 穏やかにする。霊的な事柄を教えるうえで穏やかな雰囲気や常を保つということは非常に大切です。みたまは「静な細い声」で話します。(I ニーフай17:45) ですから騒がしい雰囲気の中で、特にいさかいなどのさなかに霊的な感情を認識するのは困難です。親はこの点について、まず自分たちから始めるべきです。私たちは悔い改めと信仰によって、家族の中で平和を作り出す者となるよう常に努力する必要があります。私たちは

穏やかにまた敬意をもって愛と感謝を示し、自分に非があればすぐに謝り、人の過ちを気持ちよく赦し、快活にしていなければなりません。そのための努力がすぐに結果に出てくるとは限りませんが、それでも家庭はよりよい生き方を繰り返し実践するための最高の場なのです。私たちが家庭から、主のみたまに背くようなテレビ番組、ビデオ、音楽、書物などのこの世的な影響力を排除するのなら、成功にさらに近づくことができます。

3. 子供のレベルに応じて福音を教える。わかりやすく純粋なままに教えられた王国の教義は、みたまの確認の証が与えられるときに、子供たちに永続的な影響を及ぼすようになります。ある意味では私たちの子供も、求めまた学ぶ福音の求道者と言えます。家庭の夕べで子供が質問をしたり自分の考えを話したりするときには、ピントがずれているように思えても、真剣に耳を傾け、



考えを促すようにする必要があります。それは彼らの考えに耳を傾げるために時間を割くことによって、レッスンプランが計画どおりにいかなくなったとしても必要なことです。

4. 健全な家族の活動を通して子供たちを導く。注意深く選んだ活動はこの世的な影響力を除き去り、家族を平安と愛に満ちた助け合いの輪の中に導く助けとなります。霊的な感情のひとつである永遠の家族への帰属感は、神聖な標準を子供たちに与えてくれます。子供たちはこの標準と照らし合わせてさまざまな人間関係について考えるようになります。たとえば、青少年が家族と霊的なきずなで結ばれていれば、めったに非行グループとの交わりに心を向けたりはしないでしょう。

我が家の娘のひとりが、子供時代、青少年時代の最も心に残る思い出は「家族が皆集まり、穏やかに、円く座って話をし、歌を歌い、主のみたまを感じた時のこと。と

でも幸せだった」と話してくれたことがあります。

5. あらゆる機会をとらえて子供に話す。私たちのすばらしい思い出の中に、たびたび家族が心を打ち明けて話し合った体験があります。子供たちはベッドに入る時を遅らせてでも、話し合いをしました。私たちは子供たちの話に耳を傾け、子供たちからその日にあった楽しいことや悲しかったことを話してもらうためにさまざまな質問をしました。それはさまざまな感情について話し合いのきっかけを作り、また子供たちに、日々の生活の中でみたまへの心の向きがどうなっていたかを理解させるこの上ないすばらしい機会となりました。霊的な感情について子供たちと話し合う機会は、家庭菜園、皿洗い、買い物など日常的な活動をしながらでも見いだせます。

6. みたまのささやきに耳を傾ける。子供たちがみたまの働きかけを喜んで受け入れられるようになるための

私たちの子供も、求めまた学ぶ福音の求道者と言える。子供たちが自分の考えを話すときには、真剣に耳を傾ける必要がある。それは彼らの考えに耳を傾ける時間を割くことによって、家庭の夕べのレッスンプランが計画どおりにいかなかったとしても必要なことである。

機会を、私たちは心に留めなければなりません。つまり、子供たちが感謝の念を抱き、祝福について考え、靈感を受けられる機会などです。そのような機会を親としてやさしく指導するにはどうしたらよいかがよく伝わってくる話を、ある母親から聞いたことがあります。

彼女の息子のリチャードとジョーは学校の催し物で安価なバルサ材の模型飛行機を賞品としてもらい、喜々として帰って来ました。長男のサムも同じ物をふたつ獲得して大得意でした。ところがその夜、ベッドに上がる時、リチャードが過って自分の飛行機の上にひざをつき、壊してしまいました。リチャードはとてもがっかりしてうなだれてしまいました。その時母親がサムに飛行機のひとつを弟にやるように提案しました。するとサムはこう言いました。「お母さん、そんなひどいよ、ぼくが壊したわけじゃないんだよ。」

母親はやさしい言葉で、彼がバプテスマの後で受けた聖霊の賜のことを思い出させ、こう言い添えました。

「自分の心に聞いてみて。どうしたらいいか自分で判断できるから。」

少しして、リチャードは涙をふきながら、飛行機をくれたサムに感謝の言葉を言いました。そしてサムは日記にこう書きました。「弟に飛行機をやった時、心がとても明るく、温かくなった。それはとても温かくて、心のはげけそうだった。胸の中がとても熱くて、夜はほとんど眠れなかった。」彼は母親に、どうしたらよいかを決めるのに聖霊の助けがあったことを話しました。

家庭の中に問題があるときは、みたまについて教えるのが特にむずかしく思えます。私たちの最初の対応は、子供を険しい目でらみつけたり、責めたり、けなしたり、とがめたりすることではないでしょうか。しかしそ

のようなときにこそ、自分からみたまを求め、みたまの力と導きによって平静さを取り戻すことが大切なのです。そうして子供の不従順、争い、反抗に対処していくときに、私たちはみたまによる癒しを受け、みたまによる安らぎを家族に教えることができるのです。

「あなたは息子や娘を天に行くよう強制することはできない。あなたが正しくないのに子供たちを正そうと手荒な方法を用いると、それは子供たちを地獄に追いやっていることになるかもしれない……。愛、親切、偽らざる愛、説教、論理によってのみ子供を正すことができる。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」p.306)

そのためには、強制的に子供たちの行ないを正したいという気持ちと戦いながら、彼らの言い分やフラストレーションに忍耐強く耳を傾ける必要があるかもしれません。自分自身の至らなさを子供たちに告白し、赦しを請うことになるかもしれません。また、どれほど大切に思える事柄であっても自分たちがしていることを後回しにして、子供たちの必要を満たすことを求められるかもしれません。

子供に教えるというこの神聖な務めを忠実に果たしていくとき、私たちは決してひとりではありません。犠牲は天の恵みをもたらします。そして、子供の霊的感受性を養うという責任以上に、天の恵みを必要とする働きはほかにないのです。

主は私たちを助けると約束していらっしゃる。(教義と聖約45:57-58参照) 私たちの犠牲、涙、祈りは決して無駄になることはありません。子供を教えるために努力するなら、必ず天の助けが授けられるのです。

「この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。」(教義と聖約64:33) □

種まきの日

ネトサワルコヨトル・サリーナス・V

日 曜日の神権会がきっかけでした。メキシコ・グアダハラユニオンステーキ部コンスティトゥションワード部の長老定員会の兄弟たちは、才能豊かな教師である定員会会長のレッスンに聞き入っていました。出席者の中には、新しく長老の職に聖任された兄弟とその父親がいました。父親の方は、長い間教会から遠ざかっていたのですが、再び集うようになったところでした。

その日のレッスンは長老定員会そのものについてでした。「神権定員会とは何でしょうか」と会長が尋ねると、クラスの兄弟たちからいくつかの答えが返ってきました。神権定員会は家族のようなもので、定員会の兄弟たちは一人一人の福祉について心からの関心を示し、互いに助け合うべきであるという答えでした。

ワード部の監督をしていた私は、神権会の終わる少し前にレッスンに参加しました。私は手を挙げて話す許可を得ると、こう言いました。「ちょうど今朝聞いた話なのですが、定員会の一員であるノリエガ兄弟が穀物の種をまくのに必要な機械が手に入らなくて困っているそうです。雨季が始まっているので種を急いでまかななければならないのですが、ノリエガ兄弟には無理かもしれません。なにぶん彼は高齢ですし、助ける人もいないですからね。」

そして、「明日、皆でノリエガ兄弟の種まきの手伝いに行きませんか」と提案しました。必要な機械がなくても、皆で力を合わせればなんとかなるはずですよ。その日

のレッスンを実行に移せるこの機会に全員が胸を弾ませ、定員会会長が必要な手はずを整えました。

翌日ノリエガ兄弟は道具と種を用意して私たちを待っていました。長老定員会の兄弟たちが助けに来てくれると聞いて眠ることができなかったと話していました。兄弟たちが何人かで雑草や小石を除き、ほかの人たちは地面を耕し、種をまき、土をかぶせました。いちばん熱心な参加者は最近教会に戻ってきた例の父親とその息子でした。

種まきが終わった時はもう暗くなっていました。土まみれの私たちは、へとへとに疲れ、手に水膨れができたり、服にとげが刺さったりしていました。しかし、自分たちの兄弟のひとりに奉仕できたことで、皆は非常に満足していました。そして神権会でのレッスンの意味をよく理解できたと感じました。ノリエガ兄弟は感謝を述べ、定員会の兄弟たちと並んで働いていると、自分が若返って昔のように強くなったような気がしたと話しました。最近教会に戻ってきたあの父親もまた、奉仕に参加して力と勇気が得られたと語りました。

私たちが立ち去ろうとした矢先に雨が降りだし、皆びしょぬれになりました。しかし私たちはその雨を祝福と感じました。天から注がれる雨は種まきの日締めくくりにして、私たちが何より求めていたものだったのです。

□



ROBERT
ANDERSON
1937

光を忘れず

イタリアの若い女性が
キャンプで得た光



「笛が短く3回響きます。夕食の合図です。少女はちょっとためらいますが、夕食を少し我慢^{あかし}しても証と友情を分かち合うことにします。」

ドン・ソープ、キャサリン・ソープ

遠くの方から、山の木々の間を縫って下りてくる声が聞こえます。岩だらけの坂を見上げると、イタリア人の女の子が3人、腕を組んで歌いながらこちらに歩いて来るのが見えます。やがて、その歌が末日聖徒の若い女性の好きな「信仰により歩む」であると気づきます。イーリス・カルティア、アンナリサ・ブランドニシオ、ステファニア・フェルラッサノの3人は私たちに近づくと、みんな一斉に話し始めます。英語とイタリア語とフランス語と大きな手振りが入り交じっています。それから、ステファニアが有名なイタリアの歌を私たちのために歌い踊りながら、陽気な笑い声を上げます。そして再びまじめになって、みんなで末日聖徒の賛美歌を数曲歌います。この15歳から17歳の若い女性は、イタリアのさまざまな地域でまったく異なる環境の下に育ったのですが、みんなの仲のよさは、一目見ればわかります。

これは1990年の夏に開かれたイタリアの復ステーキ部合同の若い女性キャンプ「たいまつ90」が開かれた時のことです。130人以上の若い女性が、ローマからおよそ80キロ離れたラクイラ近くの起伏の多い山で行なわれた、この1週間のキャンプに参加したのでした。

私たちふたりは、ワード部の若い女性がキャンプに出発する当日に、まったく偶然イタリアのトリエステの町に居合わせました。そして、トリエステワード部の若い女性の指導者をしているリタ・シーナ姉妹が、一緒に行かないかと誘ってくれたのです。私たちはほかに予定があったのですが、心にささやく声に促されてキャンプに行くことにしました。今でもキャンプに行っただけでほんとうによかったと感謝しています。

キャンプで知り合った女の子たちには、私たちの霊を鼓舞する何かがありました。たぶんそれは、彼女たちの内



PHOTOGRAPHY BY DONT THORPE





から発する輝きや理想を語る熱意だったので。あるいは、指導者に対する敬意にあふれた態度だったかもしれません。いずれにしろ、互いへの愛が、私たちを感動させたおもしろい理由であることに間違いはないでしょう。そしてその愛は、一緒にキャンプ生活をするにつれて日一日と深まっていきました。

キャンプを終えてから数年になりますが、私たちは「たいまつ90」に参加した少女たちの何人かと文通を続けてきました。キャンプで経験したあの驚くほど強いみたまが一人一人の生活に影響を及ぼし続けていることを確かめたかったです。うれしいことに、みたまの影響力は今も確実に彼女たちの生活に息づいています。

始まり

キャンプは若い女性の信条を表わす7つの班に分けられました。それぞれの班には、いくつかのステーク部や地方部からの参加者が交じっていて、イタリアのほかの地域から来た参加者と

友情をはぐくめるように配慮されていました。キャンプ場は起伏の多い山々に囲まれたロコディメソ高原にあって、あちらこちらに張られたたくさんのテントでは、女の子たちのおしゃべりと笑い声が絶えませんでした。

笛が短く3回響きます。夕食の合図です。3人の少女はちょっとためらいますが、夕食を少し我慢しても証と友情を分かち合うことにします。この控えめな少女たちの歌をもう数曲聞いてから、私たちもしぶしぶゆっくりと集合場所に向かいました。

毎朝、若い女性たちは旗の掲揚式に集まり、その後ゲームをします。今朝は、雲がかかって冷たい山風が吹いています。女の子たちは旗の前に半円を作って並びます。太陽が山の頂から少しずつ顔を出し始める中、皆で静かに開会の祈りを捧げます。鳥のさえずりとこおるぎの音が、軟らかな風の音とともに聞こえてきます。きょうは特別な朝です。この地域の地区代表を務めるクリスチャン・ウブラー兄弟が若い女性に向けて話をしてくれるのです。ウブラー兄弟は、若い女性のプログラ

ムが将来の計画を立てる助けとなることについて話しました。話し終わると、1本の小枝を手に取って、式が終わった合図にそれを折りました。さあ、ゲームの時間です。そして、この日のゲームの時間こそあの特別な出来事の始まりでした。

参加者がいろいろなグループに集まるにつれて、ひとつのグループだけがぼつんと孤立しているように見えます。この小さなグループは、親の仕事や軍務の都合で一時的にイタリアに滞在しているアメリカ人の少女たちです。彼女たちはイタリア語を話せないうえに、イタリア人の少女たちにとっては当たり前のような習慣も知りません。気まずそうに立っていると、イタリア人の少女たちが集まって何か相談し、アメリカ人のグループの所にやって来ました。そして去年フィレンツェの教会主催の集会で経験したことを話し始めます。「私たちのグループのひとりがイタリア語を話せなかったの。それで一日じゅう言葉を使わずにジェスチャーだけで過ごすことにしたのよ。その日が終わるころには、みんなお互

「初めて会ったのに、まるで生まれた時からずっと友達だったように思えました。彼女たちの模範のおかげで、毎晩モルモン経を読むようにもなりました。そしてキャンプに参加し、そこに集まったみんなの愛を感じることに

よって、それまでに感じたことがないほど神を近く感じることができました。しばらくの間神と私たちを隔てている幕が取り去られたかのように思えたほ

いにとても親しくなることができたわ。」間もなく、アメリカ人もイタリア人も一緒に歌ったり、話したりするようになりました。これがすべての始まりだったのです。

永続する影響力

キャンプでアメリカ人の若い女性グループの指導者を務めたリンダ・ブラック姉妹は今もイタリアのペローナに住んでいます。彼女の手紙によれば、アメリカ人の少女たちの何人かは、イタリア人の少女たちとともに親密な友達となり、今も手紙のやり取りを続けているそうです。

ベニスからキャンプに参加していたアンナリサ・ブランドニシオはこう書いています。「言葉や習慣は違っても、私たちとともにあった主のみたまがとても強かったので、アメリカ人のグループともひとつになっていると感じられました。」

キャンプについてはこう言っています。「夜になってもなかなか寝つかれないことが多かったんです。あの山でキャンプをした1週間は、感激で胸がいっぱいのすばらしい毎日だったからです。『たいまつ90』は、よい友達を持つことで神に近づけることを私に教えてくれました。」

現在アンナリサは19歳です。イタリア・ベニスステーク部のモデナワード部で、ステーク部宣教師と家庭訪問教

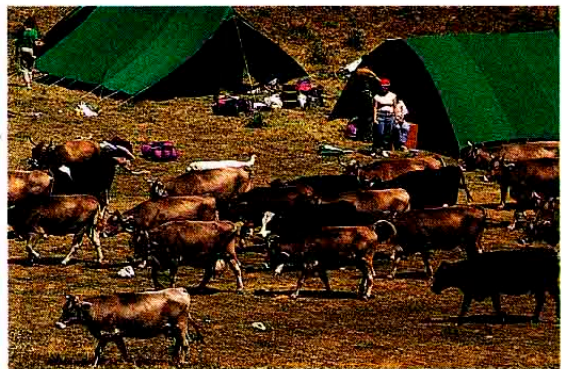
師として召されています。この夏は宣教師とともに伝道を体験するつもりです。そして、ふさわしい年齢に達したら専任宣教師として伝道に出る予定です。

イタリア・トリノ地方部ジェノバ第3支部のソニア・プレスコビッチはこう書いています。『『たいまつ90』の思い出は生涯私の心から消えないでしょう。それぞれ遠く離れた場所から来ていたけど、私たちの理想や思い、信じていることは同じでした。初めて会ったのに、まるで生まれた時からずっと友達だったように思えました。自分の家族と同じように愛するようになったのです。彼女たちの模範のおかげで、毎晩モルモン経を読むようにもなりました。そしてキャンプに参加し、そこに集まったみんなの愛を感じることによって、それまでに感じたことがないほど神を近く感じることができました。

しばらくの間神と私たちを隔てている幕が取り去られたかのようにさえ思えたほ

です。」ソニアは今20歳で、支部の扶助協会会長会の第一副会長であり、家庭訪問教師と支部の聖歌隊の指揮者、オルガニストを兼任しています。今年じゅうに専任宣教師として伝道に出る予定です。最近の手紙の中で、ソニアはこう言っています。「独身成人を対象としたこの前のカンファレンスに参加した時、『たいまつ90』で知り合った人たちの何人かと再会し、キャンプでのすばらしい思い出を語り合いました。私は今でも『たいまつ90』で出会った人たちに特別な気持ちを抱いています。」

イタリア・ミラノステーク部ビメルカティ支部のイーリス・カルティアはキャンプで会った少女たちのことをこう書いています。「イタリアでは教会はまだあまり大きくないので、同じ支



「最後の証あかし会では若い女性と指導者が手をつないで大きな円を作りました。そしてお別れの歌を歌ったのです。みんな最初は力強い声で歌い始めたのですが、最後は涙とすすり泣きになってしまいました。閉会のお祈りの後は、皆がひと言も語らないままにしばらく

時が流れていきました。」次のように語っている若い女性もいる。「若い女性のキャンプでは主のみたまが魔法のような役割を果たします。みたまがほんのひととき私たちの心を揺さぶっただけで私たちの人生は永遠に変わるのです。」

部やワード部の会員どうしであっても、遠く離れた所に住んでいることも珍しくありません。ですから、キャンプで自分と同じ信仰や思いを持っている女の子たちと触れ合えたことは、とても大切な思い出になっています。人生の貴重な1ページです。世にあっても世のものとならず、周りの人たちの光となるための力を、あの時の経験から私は得たのです。私たちを隔てる時間も距離も、福音を愛する人たちが喜んで集うことを妨げられないと知っています。彼らがどこの出身であろうともです。」

キャンプのすぐ後、イーリスは私たち夫婦にこんな手紙をくれました。「キャンプでの経験のおかげで、大切なことに心向けられるようになりました。伝道に出て、いつか神殿で結婚する日のために、人生の計画を立てられるようになったのです。」

3年後の現在も、まだイーリスはこの目標が大切だと感じています。イーリスは今19歳で、支部のオルガニスト、扶助協会聖歌隊の指揮者、そして家庭訪問教師として召されています。イタリアのトリノで専任宣教師とともに短期間働き、その時宣教師として知り合った73歳の女性と文通しています。そして伝道に出る準備を進めています。

イーリスは今もあのキャンプの影響を感じています。「『たいまつ90』は私に理想と模範を示してくれました。その理想と模範は今も私の心の中に息づいています。キャンプで指導者が示してくれた模範は、私の指導者としての姿勢にかなり影響を及ぼしています。」

イタリア・プーリア地方部フォッジア支部のステファニア・フェルラッサノはキャンプについてこう記しています。「近代的な設備など何もない山での生活を通して、自分が今までどれほ

ど物のありがたさを感じていなかったか、そして主がどんなに私を祝福してくださったかよくわかりました。また、自分の命が神のみこころひとつにかかっていることと、福音が私のよりどころであり、道しるべであることを知るのにも役立ちました。そして、達成したい目標があるならそのために努力しなければならないことと、もし私たちが自分の分を果たすなら足りないところは主が補ってくださることをキャンプで学びました。」

ステファニアは今20歳で、21歳になったらすぐに伝道に出る用意ができています。現在、姉がミラノで伝道しています。ステファニアは支部の扶助協会の第一副会長、それに支部の図書主任と書記補助を務めています。また日曜学校で12歳から18歳までの青少年クラスの教師もしています。ステファニアは「3年たった今も、『たいまつ90』の影響は私の証あかしとなって残っています」と語っています。

「頂上から、さらに高く」

若い女性たちが火のない「キャンプファイアーの輪」を作っています。山で大がかりなたき火をするのは法律で禁じられているからです。活気ある会話が飛び交っています。熱を込めて話すあまり、手を大きく動かしている少女たちがあちこちにいます。そしてほほえみと笑い声、ときには同情の涙が





それに加わります。

イタリア・ベニスステーキ部の若い女性の指導者で、キャンプの指導者のひとりでもあるアデレ・ペロニ姉妹が立ち上がると、少女たちのにぎやかな笑い声と話し声はやみ、山のそよ風の軟らかな音が聞こえてきます。「若い女性としての標準をいつも心に留めましょう。……そして自分に忠実でいてください」と姉妹は話しかけます。

キャンプのテーマ「頂上から、さらに高く」とテーマソング「信仰により歩む」は世界じゅうの若い女性プログラムの理想を反映しています。キャンプの参加者はこれまでもこの概念を何度も耳にしてきました。しかし、山を間近に仰ぎ、新しい友達に囲まれながらこれらの言葉を聞いていると、少女たちは精神が高揚してくるのを感じます。これらの言葉が、お互いへの愛をさらに深め、もっとみたまを強く感じたいという願いを心に植えつけてくれるのです。

そそり立つ山々に日が沈むと、辺りは次第に暗くなり、肌寒くなります。

少女たちはテントに集まり、キャンプでの経験を語り合います。風の中でのテント張り、木材とロープで仕上げたテーブル、電子レンジやガス器具なしで作った料理、そしてゲームやお互いにし合っていたずらを思い出して笑っています。それから夜が更けるにつれてもっと個人的な話題に移り、思いや希望を語り合います。多くの場合、その話題は福音への思いと、それぞれの生活の中で、福音がどういう意味を持っているかに集中します。

私たちは最後の夜を迎えずにキャンプを去らなければなりません。すると、イタリア・ベニスステーキ部の指導者のひとり、ティシアナ・ロサット姉妹がその夜の経験を書いて送ってくれました。「最後の証あかし会では若い女性と指導者が手をつないで大きな円を作りました。そしてお別れの歌を歌ったのです。みんな最初は力強い声で歌い始めたのですが、最後は涙とすすり泣きになってしまいました。閉会のお祈りの後は、皆がひと言も語らないままにしばらく時間が流れていきました。」

私たちがキャンプに参加したのは、このような経験が末日聖徒の若い女性たちの生活を変えるのを目にしたかったからでした。今にしてみれば、この経験は若い女性だけでなく私たち自身の生活も変えてくれたことに気がつきます。簡潔な福音の標準を守って生活することを通して彼女たちが感じた喜びと、私たちや仲間を示したその誠実な愛と尊敬の気持ちは、私たちの人生にいつまでも残る影響を及ぼしてくれたのです。

あのキャンプで出会った少女たちから今も手紙を受け取りますが、彼女たちはキャンプとそこで会った人たちへの特別な思いと、「たいまつ90」のおかげで生活がどう変わったかをたびたび知らせてくれます。そのうちのひとはキャンプの参加者全員の気持ちを次のようにまとめています。「若い女性のキャンプでは主のみたまが魔法のような役割を果たします。みたまがほんのひととき私たちの心を揺さぶっただけで私たちの人生は永遠に変わります。」□



私のばらの木

匿名

我が家の庭で丹精込めて育てている花の中に、私が特にいとおしく思っているばらの木があります。そのやせ細った枝は、勝手な方向に伸び、元気もありません。自分の重さのためにまっすぐ上に伸びることができず、芝生の上をはい回っています。私の父も主人も、何かにつけて、そんなばらの木は抜いってしまったらどうかと言いますが、私にはそんな気は毛頭ありません。それは、息子のジョン*がくれた母の日の贈り物だったからです。

あの子がそれを贈ってくれた日のことを、私は今でもよく覚えています。最初、私はあの子が母の日だということをつっかり忘れてしまったのではないかと思いました。その日の朝早く、何も言わずに出かけて行ったからです。一体どこへ行ったのでしょうか。せつかくの休日なのに、それを忘れるなんて、あの子らしくありません。それでも、私は教会で楽しく過ごし、家族からそれはそれは心のこもったプレゼントをもらい、家族の準備してくれた夕食を楽しくいただきました。

その晩遅くなって、あの子はやっと帰って来ました。美しく咲いたばらの木が植えられた植木鉢が、その手にありました。あの子は、ばらを買ったら、母の日の特別な贈り物として、私と一緒に教会へ行く計画を立てていたのです。でも、そういう思いやりのこもった大きな彼^きの計画にはよくあることですが、今回の計画も途中で挫折^つしてしまったのです。私にぴったりのばらを買おうと探し回っているうちに、車のキーをなくしてしまい、動きが取れなくなったというのです。私はその話を聞きながら、あの子のくれた手書きのメッセージを読んでいます。あの子は次の週には私と一緒に教会へ行くと約束してくれたのです。涙で目の前がかすんできました。あの子の熱意のこもった言葉に、うそはありません。あの子はほんとうにそうするつもりでいたのです。でも、必ず何か支障を来すのです。

私はそのばらの木を小さな植木鉢に植えたまま1年以上育てました。鉢に添付されていた指示書に忠実に従いました。冬の間はガレージに入れ、アリゾナ*の太陽の強い夏には日よけを作ってやりました。そして、いつも家族と一緒に、あの子がいつかりっぱに成長し、花咲く日が来るようにと祈り続けました。あの子がくれたばらと同じように、いつか花咲く日が来るようにと願っていたのです。

私たちがアリゾナから故郷のワイオミングへ引っ越すことになった時、私はそのばらの木を車と一緒に積み込みました。あの子は、自立してやってみたいと言うので、そのままアリゾナに残りました。私たちはワイオミングの家を終の住み家にするつもりでいましたので、あの子のくれたばらの木は花壇に植えることにしました。

最初の年は、まったく育ちませんでした。いろいろ手立てを講じて、園芸の本を読んだり、人からアドバイスを受けてりましたが、だめでした。根に水をやり、肥料をやり、あぶら虫を取り、あらゆることを試しました。それでも、ばらは枯れないにせよ、花をつけることはありませんでした。私はばらの世話をするたびに、アリゾナに残してきたあの子のことを考え、あの子のために祈りました。あの子はときどき電話をくれ、いかにも元気そうに、「だいじょうぶだよ、お母さん。何も問題はないよ」と言います。でも、私たちは心配でした。私はばらの木の手入れをするたびに、来年こそは、もう少し育てほしいと願いました。

秋になると、ばらの木の余分な枝を切り落とし、根を守るため、周囲に肥料を施しました。その年の冬は、40年ぶりという寒さでした。私は、あのかげがえのないばらの木がちゃんと生き延びてくれるかどうか、心配しながら見守っていました。吹きすさぶ風にコートをはためかせ、私は雪の中にひざまずき、むき出しのばらの枝を見詰めるのです。この汚れた雪の下に、命の息吹はあるのだろうか。私にはわかりませんでした。

その年の冬は、息子の生活も、本人が願っているほど順調にはいっていないことを、私はうすうす感じていました。東の風が吹き、窓ガラスを揺らすたびに、私は幾

*文中の人名と地名はすべて仮称です。

晩眠れない夜を過ごしたことでしょう。あの子は教会へ行っているだろうか。ちゃんと食事は取っているだろうか。マリファナを吸うような仲間と付き合っていないだろうか。そう考えると眠れなかったのです。あの子は電話では言いませんでしたが、自分で背負い切れない大きな問題を抱えて苦しんでいることを、私たちは感じていました。声の様子ではうつ症状が出ているのではないかと思われました。だから、あの子と電話で話すたびに、愛していることや、一緒に暮らせないので寂しく思っていることや、いつワイオミングへ来てもいいのだということ、欠かさず伝えました。また、医者にかかるのなら、喜んでその費用を負担する用意があることも伝えました。

ようやく春が来ると、ほかのばらの木は小さな赤い芽を出し始めました。しかし、私のあの特別なばらの木だけは、何も芽をつけず、まるで冬の間に枯れてしまったと言わんばかりです。私は手で水をやり、木を覆っている枯れ葉を片付けました。なんとかして命を取り戻してやりたいという一念でした。

ある日の午後、造園を仕事にしている私の父が来て、あのばらの木を細かく調べると、この木はもう枯れているとはっきり言いました。父は、節だらけの枯れた切り株をつえてたたくと、もうあきらめて別の木を植えてもいいころだ、と言うのです。でも、私はあきらめませんでした。

その年の春は、私はあの子のために、断食と祈りの回数を増やしました。神殿へ行く回数も増やし、行くたびに祈りの中にあの子の名前を加えてもらいました。そんなある日の真夜中に、あの子から電話がかかってきました。ワイオミングへ来ることにしたと言うのです。理由については何も話しません。しかし、それはどうでもいいのです。とにかく、また家族と一緒に暮らせることになり、私たちは満足でした。

それから間もなくのことです。ばらの木の手入れをしている時に、私は、あのかげがえのないばらの木の根から、小さな緑の若枝が芽を出し始めていることに気づいたのです。死んだと思われていたのに、生き延びていたのです。私は興奮して、父にすぐに来て、奇跡の生長を

見てほしいと訴えました。

「花はつかないな」というのが父の言葉でした。父は、肥料で覆われた若木の周囲を自分のついでじっくりとつついてみると、こう言いました。「芽の出る場所が違う。接ぎ木をした所の下から芽が出ているんだ。だから、花をつけることはないよ。これは抜いて、新しいばらを植えた方がいいな。」

「絶対いや。」私のほおを涙が伝います。枯れたと思っていたのに、あの冬を生き抜いてきたのです。どうして、今さら抜いてしまうことなどできましようか。

私は今でもばらの木の手入れを続けています。たびたび朝早く花壇に出て働く私にとって、芝生にひざまずき、ばらの手入れをし、あの子のために祈る時に味わう平安な気持ちは、とても貴重なものです。私はあの子が帰って来てくれたことを感謝しています。あの子のための家族の祈りは今でも続いています。私たちは皆、あの子が戻って来てくれたことを喜んでいます。少なくとも、あの子がちゃんと食事をしているかどうか、心配する必要はなくなりました。母親としての私の直感では、あの子にはまだ何か精算し切れないものがあるようです。主人も私の父も、あの子はまだ若いのだし、いつか大人になって、ちゃんとした生活をする時期が必ず来る、と言います。私は朝の静かなひとときを大切にしています。それもすぐに、日の光が強くなって大気の温度が上がり、忙しい1日の務めが始まって、かき消されてしまうでしょう。でも今はまだだいじょうぶです。

私はしばらく手を休め、朝焼けであかね色に染まる空を見上げます。早朝はすばらしいひとときなのに、子供のころどうしてあんなに嫌いだったのでしょうか。私は13歳の夏を、アイダホ州のプレストンにある祖母の家で過ごしていました。私は木いちごを食べたり、用水で泳いだり、本を読んだりしたかったのに、厳格な祖母は私に、ばらの手入れをし、いちごを摘み、裁縫を習うようにと言いつ張りました。だから、私は祖母が朝食の準備をしている音が聞こえると、ベッドの中にもぐって、眠っ



ているふりをしたものです。祖母は、外へ出て庭の手入れを手伝うように言います。でも、私はできるだけ聞こえないふりをするようにしました。そのうち、祖母が枝ばさみで木を刈り込む音や葉づれの音を聞きながら、また眠ってしまうのです。

庭に出て働かなければならない羽目になった時も、私は文句を言い続けました。でも、朝日が顔をのぞかせるころ、祖母と話をしていると、祖母がだんだん好きになってきました。庭では、祖母は家の中ほど厳しくありません。祖母は私に、祖父を心から愛していることや、祖父が随分長い間教会に入らなかつたけれど、決してあきらめなかつたことなどを話してくれました。祖母の目も涙で曇っています。そして、生涯でいちばんうれしかったのは、祖父が家族の結び固めを受けるために家族全員を神殿へ連れて行ってくれた日だったと、うれしそうに言うのです。

庭で働きながら、私はその祖母のことや、祖母が祖父に深い信頼を寄せていたことを思い出しています。花のつかない、余計なばらの木の枝を刈っているうちに、私の手も疲れてきます。刈り取った枝を上手に積み上げると、突然、地下にあるあの子の部屋のラジオから、けたたましい音楽が耳に飛び込んできます。でも、その音楽もすぐに消され、また静かな時間が訪れます、あの子ももうじき起きてくるころでしょう。

私が枝を刈り終えるころには、朝日もかなり昇って、私のほおも暖かくなってきます。積み上げた枝も、予想よりずっと多かつたようです。とげのある枝をごみ袋に入れてみると、手や腕が傷だらけになってしまいます。大きなとげが何本か私の両手に刺さり、出血してしまいました。芝生にひざまずいていると、小鳥のさえずりが聞こえます。親鳥たちは、自分たちのひなが初めて空を飛ぶ光景を見ながら、どんな気持ちでいるのでしょうか。私の心も、手と同様に痛みます。日差しもめつきり強くなってきました。もう家の中に入る時間です。

バイクのエンジンのけたたましい音が聞こえます。あ

の子が仕事に出かけていくのでしょうか。私は少し手を休めます。あの子のことを考えると、涙があふれるように出てきます。そんなとき、私は祖母のことを思い出します。祖母がいちばん美しいばらの枝を1本取って、半分枯れた古い枝に接ぎ木をしていた光景がよみがえります。何年も前に聞いた祖母の声が私の心に響きわたるのです。「やってみないうちは、この木だつて見捨てるわけにはいかないわ。」あの遠い昔の朝、祖母はこう言ったのです。「かけがえのないものだから、一度はやってみないとね。」

私があの特別な木のわきでひざまずいていると、いよいよ朝日が山の端から顔を出し、日差しが強くなり始めます。あの子のくれた花の咲かない木に、父のばらの木の枝をもらってきて、接ぎ木ができないのでしょうか。そうしたら、たぶん、花をつけるかもしれません。それにひよっとしたら、父の庭には、祖母の庭で育てられた木の何代か後のばらだつてあるかもしれないのです。私は目を閉じて、祖母が朝焼けの中で、かぐわしいばらの花の手入れに励んでいる姿を心に浮かべます。アイダホのやせた土地ではばらなんて絶対に育たない、などと祖母に熱心に忠告した人はいなかつたのでしょうか。あんなに長い間教会に入ろうとしなかつた祖父を見て、祖父が気持ちを変えることはない、などと言つた人はいなかつたのでしょうか。祖母はそういう人たちの話に耳を傾けたのでしょうか。それとも、ひたすら働き、祈り、希望を持ち続けたのでしょうか。

私は現実的でないかもしれませんが、私は、とうてい起きそうもない奇跡を求めて祈っているだけかもしれません。きょうは父の庭へ行って、父のばらから少し枝をもらってきましょう。かけがえのない私のばらの木を見捨てるわけにはいかないのです。□



心からの祈り

セツ・H・ボイル

学校やスポーツなどさまざまなことにかかわりながら、私は教会のほかの子供たちと同じように育ちました。18歳になるころには伝道に出るのを楽しみにしていました。私にはブラジルで伝道した兄がいましたし、また当時、姉がイギリスで伝道中でした。伝道に出ることは正しいことだといつも感じていました。

ところが高校生活が終わりに近づくと、少し不安を感じるようになりました。福音のあらゆる部分、とりわけジョセフ・スミスの経験について、はたして自分に証あかしできるだろうかと思うようになったのです。親友のひよりは私にこう尋ねました。「君はどうして伝道に行くんだい。ただ、お父さんに行くように言われたからかい。それとも自分だけ行かないことが怖いからかい。」私は彼の問いについて何度も考えてみました。そしてなぜ自分が伝道に行くのかその理由をはっきりさせるべきだという結論に達しました。

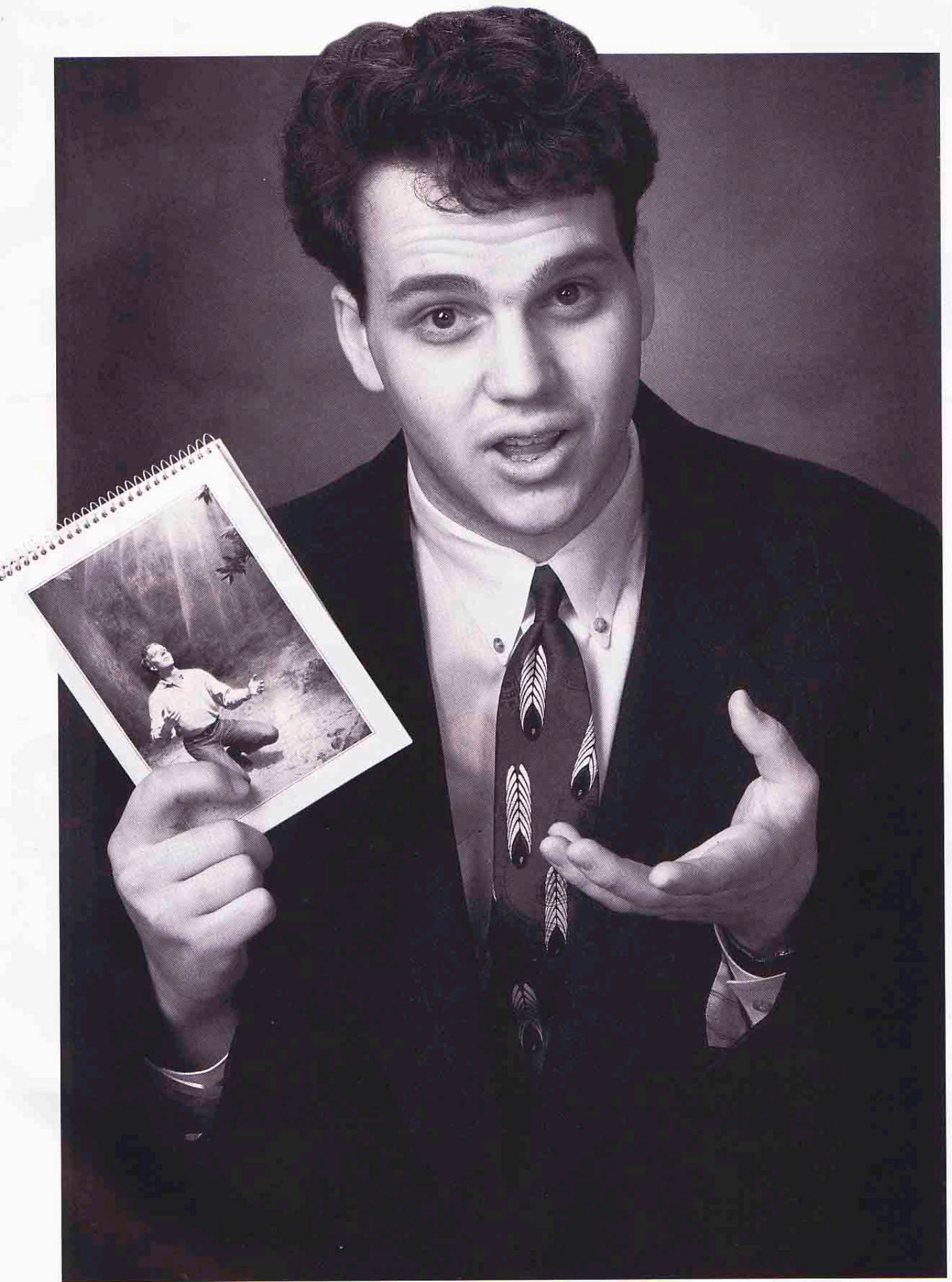
そのころにはもう伝道に出るための申請書を提出していました。私は父に頼んで、伝道への備えを手伝ってもらうことにしました。そして毎週日曜日になると、1、2時間かけて私の部屋で父と福音の原則について話し合ったり、聖典を読んだりするようになりました。父が「奇しきみわざ」を読むことを勧めてくれたので、宣教師訓練センターに入る前にそれを読み終えました。私は、自分は正しいことをしているという、充実した気持ちを感じていました。

しかし、宣教師訓練センターに入って数週間が過ぎる

と、私はふさぎ込んでしまいました。ジョセフ・スミスに対する証が、自分で必要としているほどには、まだ強くなかったからです。私は心からの祈りを捧げるようになりました。しかし、どれだけ祈っても何の答えも与えられませんでした。何か自分のやり方が間違っているのかもしれないと思い、聖典を読んだり、だれかに話を聞いてもらったり、とにかくあらゆる手を尽くしましたが、それでも答えは得られませんでした。

それから1週間ほどして、宣教師訓練センターで私の大好きな教師が、皆にロールプレイングをさせました。最初のレッスンの中の4つ目の原則を教えるという設定だったのですが、それはたまたまジョセフ・スミスに関する箇所でした。同僚のブロックバンク長老が、予言者ジョセフ・スミスについて教え始めたまさにその時です。突然、私の祈りへの答えが与えられたのです。彼が教え終わるころには、私は涙を流していました。あの夜のことを私は生涯忘れないでしょう。そして、ブロックバンク長老に対して、また彼がジョセフ・スミスのメッセージを伝えてくれたあのレッスンに対して、永遠に感謝し続けることでしょう。彼の証のおかげで私は自分の証を得られたのですから。

今までの人生で、これほど証が強まったことはありませんでした。また、ドイツの人々にこの証を毎日宣べ伝えられることを光榮に思います。私は、ジョセフ・スミスがこの神権時代を導くために神に召されたことを今、一点の疑いもなく確信しています。□





信じることに 固く立って

十二使徒定員会会員

ジェームズ・E・ファウスト長老

愛する若人の皆さん、私たちの所属する教会は多くの事柄を象徴しています。その中には高潔さ、正直、高い道徳的標準などがあります。

私たちもひとりの教会員として、自分がどのような者であるかを周囲に示しています。人間的に強いのか、それほど強くないのか、善良か、それほど善良でないかといった何らかの事柄を体現しているのです。

私たち一人一人にとって大切なのは、精いっぱい、臆せず^{おそ}に堂々と、教会の標準を擁護し、表明することです。

私の経験からお話ししましょう。私が学んだ事柄が少しでも皆さんの助けになればと思います。

1942年、第二次世界大戦のさなか、私は徴兵を受けて米国空軍に入り、最下位の一兵卒となりました。イリノイ州シャヌー平原でのある寒い晩のこと、私は夜警の番に当たっていました。寒さに震えながらも、必死で眠気をこらえて自分の警戒区域を見回りながら、この惨めで、長い夜の間ずっと、あれこれと思い巡らし、考え続けました。夜が明けた時には、心に固く決意するものがありました。

私には婚約者がいましたが、位の最も低い兵卒の給料では結婚しても生活していけないことはわかっていました。どうしても士官にならなければと思った私は、夜警をした翌日から一兩日中に、士官養成学校への入学願書を書きました。それからしばらくたった日、ほかの数人

とともに資格や適正があるかどうか見るため審査委員会の面接を受けました。私は資格などほとんど持っていませんでした。2年間大学で学んだこと、教会の宣教師として南アメリカで伝道したこと、22歳でとても健康であること。資格といえばこれくらいでしたが、履歴書に教会の宣教師として働いたことを記せたのでうれしく思いました。

面接官たちの質問は驚かされるものばかりでした。すべての質問は宣教師としての伝道活動と私の信仰に集中しました。「たばこは吸うのか」「アルコールはたしなむか」「たばこを吸う人や酒を飲む人についてどう思うか」これには問題なく答えられました。

「祈りはするか」「士官は祈るべきだと思うか」このふたつの質問をしてきた士官はやり手の職業軍人で、あまり祈ったごとはなさそうに見えました。私は心の中で「自分が心から信じていることをそのまま答えたら気を悪くするだろうか。差し障りのないところで、祈りは個人的な事柄ですと答えるべきだろうか」と思い悩みました。私はどうしても士官になりたいと思っていました。そうすれば一晩じゅう見張りに立たずに済む調理場に立つ必要もなくなります。何よりも、愛する人と結婚できるからです。

私はあいまいな答えをするのはやめようと決心して、自分は祈ること、そしてほんとうに偉大な将軍がしてき

たように、士官が神の導きを求めるのはかまわないと思うと答えました。また、士官はその時々にあってふさわしい行動に部下たちを導かなくてはならないので、部下とともに祈ることも必要なときがあると思うと答えました。

もっと興味深い質問もされました。ある位の高い士官から「戦争中には、道徳基準は緩められるべきではないか。戦闘によって受けるストレスを解消するには、普通の生活ではしないようなことも許されるのではないか」と聞かれました。

さあ、広い心の持ち主であることを示していい印象を与えるチャンスです。この質問をした士官が、私が今まで教えられ、それに従って生きようと努力し、人々にもそう教えてきた道徳の標準に背いて生活していることは、はっきりとわかりました。私は心の中でこう思いました。「ああ、これで士官になる望みはもうまったくない。」その一方で「自分は道徳に関して自分の信念を持っているけれども、その考えを人に押しつけるつもりはない」と答えても、神に背くことにはならないのではないかという思いも頭をよぎりました。しかし、自分が宣教師として純潔の律法を教えた数多くの人々の顔が思い浮かんで消えていきました。不貞や姦淫^{かんいん}について聖典でどのように教えられているかは、私にはわかりすぎるほどよくわかっていました。

これ以上答えを引き延ばせなくなり、私はただ「道徳的標準はどんな状況にあっても変わることはないと思っています」とだけ答えました。

それからもういくつかの質問を受けましたが、それらは私が教会を世に示すものとしてふさわしく生活しようとしているか、試しているように思えました。私は面接

室を後にしながら、私の信仰について質問をしてきた面接官たちは私の答えが気に入らずにきつと低い評価しか与えてくれないだろうと考えました。数日後、面接の結果が届き開けてみると、まったく驚いたことに私の評価は95点となっていました。ほんとうにびっくりしました。私は士官養成学校に入学する許可を得た最優秀グループの一員に入っており、下士官である伍長に昇格して入学できることになったのです。そして卒業し、少尉の位を受け、愛する人と結婚して「ふたりで仲良く幸せに暮らしました。めでたしめでたし」というわけです。

これは、私の人生で最も大きな選りだだったと思います。折あるごとに、皆さんと同じように立ち上がり、自分の心の奥深くに問いかけ、そして自分が何者であることを示してきました。今までの経験の中で、自分の信じることに固く立ったからといって、常に自分の願う結果が得られたわけではありません。でも、そうすることで私の信仰はいつも強められ、願いどおりにいかなかったときにもそれを受け入れて頑張り続ける助けとなりました。

自分が何者であることをどんなに隠そうとしても、隠しおこせるものではありません。それは私たちの内側から輝き出るからです。外からでもよく見えるのです。ごまかそうとしても、自分をごまかすだけです。

自分の信じることに固く、びくともせず立つ人には、偉大な内なる隠れた力が与えられます。完全な、力強い霊の泉を授かることでしょう。

私たちが行なっているこの業が神の神聖なみ業であることを証します。この教会を導いておられるのは主、イエス・キリストです。イエス・キリストは生ける予言者を通してこのみ業を導いておられ、予言者はこの地上で進む王国の働きを導いておられるのです。□



「イスラエルの集合のため、パレスチナを奉獻するオルソン・ハイド」 クラーク・ケリー・プライン画
十二使徒定員会のオルソン・ハイド長老は聖地を奉獻した経験を次のように記している。

「〔1841年〕10月24日、日曜日の早朝、日の光がさし始めるしばらく前に起床し、開門と同時に町を出た。
ケデロン川を横切り、オリブ山に登った。そこで、厳肅な静けさのうちに、永遠の主〔奉獻の〕祈りを捧げた。」（教会歴史4：456）



風の中でのテント張り、
木材とロープで仕上げた
テーブル、電子レンジや
ガス器具なしで作った料
理、どれもがイタリアで
開かれた若い女性キャン
プの楽しい思い出になり
ました。それは、永遠の
中でどのような足跡を残
したでしょうか。(本誌
『光を忘れず』p.34参照)

